# イスラーム地域研究 (IAS) 活動報告より

**KIAS ユニット 2「中道派」研究会**
**（2007 年 5 月 21 日　於京都大学）**

発表題目：「コム在住のナジャフ学派のムジュタヒドの動向およびペルシア語におけるサドル研究文献概観」
発表者：松永泰行（同志社大学　神教学研究センター　客員フェロー）

本研究発表は、二つの目的によって構成される。第一に、シーア派の世界的な学問都市の一つであるイランのコムにおける、イラクのナジャフで学んだ法学権威（marjiʿ al-taqlīd）の現状の社会的位置づけをめぐる分析。第二に、イラン社会で故ムハンマド・バーキル・サドル師（Muḥammad Bāqir al-Ṣadr 1980 年イラクで処刑）の思想がどのように捉えられているかについて、出版状況の現状報告と内容紹介という形で情報を共有することにある。

発表者は、ハウザ（ホウゼ）を個々に独立的に存在している諸マドラサの総体であり、緩やかな繋がりによって組織化されたものとして捉える。またコムのハウザには、コム神学校教員協会（Jāmeʿ-e Modarresīn-e Ḥowze-ye ʿElmiyye-ye Qom・以下 JMHEQ と略）がある。JMHEQ は、1979 年の革命以後継続する現体制であるイスラーム体制の支持派内の保守系のウラマーによって構成される。

発表者はこのような JMHEQ をイラン政治のパワーセンターとして位置づける。現在では、同組織は故ボルージェルディー師や故ホメイニー師の非文化保守派以外の元学生から構成されているという。しかし発表者によれば、ホメイニー師が法学権威となった後の活動を考えた際、現実的にホメイニー師の学閥なるものは存在しないのではないかという。それは、ホメイニー師が大アーヤトッラー（āya allāh al-ʿoẓmā）となった後に、教授活動が可能であった時期が、ごく僅かであったためである。

また現在の JMHEQ の構成員には、ファーゼル・ランキャラーニー師（Mohammad Fazel Lankarani d. 2007）やマカーレム・シーラーズィー師（Naser Makarem Sharazi）のような現在の法学権威が含まれている。その一方で、コムで学びつつ同組織に属していない法学権威が、コムに在住しているという。発表者は、それらの法学権威が同組織に属していない理由について、体制との関係に焦点を分析を行う。すなわち、彼らは、非体制派であって「伝統的」なイスラーム思想を展開する法学権威、またホメイニー師の没後、コムでプレゼンスを確立していなかった法学権威と位置づけられる。

このように非 JMHEQ 構成員の現体制下での位置づけの後、発表者は JMHEQ とナジャフ学派の法学権威との関係を通じ、コム在住のナジャフ学派の法学権威がどのような社会的位置を獲得しているかについて分析を展開した。1994 年 12 月に発表された JMHEQ が推薦する法学権威として含まれていたベフジャト師（Mohammad Taqi Behjat）、ヴァーヒド・ホラーサーニー師（Hoseyn Vahid Khorasani）、ジャヴァード・タブリーズィー師（Mirza Javad Tabrizi d. 2006）などが、コムで高い社会的地位を保持していると考えられる。またバーキル・サドル師の弟子であるハーシェミー・シャーフルーディー師（Sayyed Mahmud Hashemi Shahrudi）に関しては、現在の最高指導者であるアリー・ハーメネイー師との関係と、JMHEQ のメンバーであることから、イラン社会での位置を

確立した法学権威であると判断される。

これら JMHEQ の概要、またコム社会におけるナジャフ学派の法学権威の位置づけを分析した発表者は、続いて「知のインフラ」整備ともいえる、ペルシア語におけるバーキル・サドル師の研究文献の概観を行った。発表者によれば、バーキル・サドル師はシーア派の復興に積極的に関与した法学者としてイラン社会で敬意を示される一人である。そのバーキル・サドル師に関する研究文献の近年の出版状況およびその傾向について、非常に詳細な紹介が行われた。参加者の中にはイスラーム学・イスラーム政治の専門家が幾人もおり、質疑応答でも白熱した議論が展開され、大変有意義な研究会となった。

報告者：黒田賢治（京都大学）

発表題目：「シーア派イスラーム運動の新展開：ダアワ党・サドル派・ヒズブッラーを中心に」
発表者：山尾　大（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

5 月 21 日に開催された KIAS ユニット 1「国際関係」主催の研究会はシーア派の国際的展開をテーマとした。フセイン政権崩壊後の政治的混乱のなかでシーア派に注目が集まっているが、シーア派が国境を越えて今現在も影響関係があり、新たな関係を作りつつ活動していることを再認識させられた研究会だった。発表者は２名であり、松永氏が、イラクのバーキル・アル＝サドルが現在のコムのハウザに与えている影響を論じたのに対し、山尾氏の発表は、バーキル・アル＝サドルの後継者たるサドル派を含めたシーア派諸勢力がイラクやレバノンでどのようにイスラーム運動を展開しているのかに焦点を当てた。

今日のシーア派イスラーム運動を語る場合、ダアワ党、サドル派、ヒズブッラーの３つの団体は欠かせない。この３つの団体はそれぞれ影響関係にあるものの、別個の活動を展開している。これら３つの団体を「シーア派イスラーム運動」の括りに入れた場合、はたしてシーア派という以外に、特に「運動」という側面に関して共通点があるのか。本発表のポイントはそこにあり、発表者はこれら「シーア派イスラーム運動」の拡大をウラマー・ネットワーク型拡大と捉えることで共通要素を探った。３つの団体に共通するのはシーア派の伝統的なネットワークに乗るかたちで拡大していることである。シーア派の伝統的ネットワーク形成はハウザにおける師匠と弟子の関係、ウラマーの家系が核となっており、今日の「シーア派イスラーム運動」でもその点は継承されている。しかし、特にハウザの位置づけが伝統的なネットワークとは異なる。伝統的なハウザはネットワークの核であり、中心である。しかし現代のシーア派イスラーム運動ではむしろハウザは利用されるものとなる。たとえばサドル派ではハウザが宣伝とリクルートの事務所を兼ねており、ヒズブッラーはハウザを所有し、イデオロギー教育や政治的動員力強化に使用する。つまり、現代では運動がネットワーク型拡大をする場合、伝統的なウラマーのネットワークやハウザなどシーア派的組織形態を「近代的」組織活動に組み込むかたちで利用するのである。

かつて、スンナ派では近代的教育を受けた「世俗的」インテリがイスラーム運動をになっていたのに対し、シーア派では伝統的教育を受けたウラマーがイスラーム運動の担い手となっていた。ところが今日ではシーア派イスラーム運動を担うウラマーが変質し、法学権威と言うよりむしろアジテーターと言ってもよい存在になっている。伝統的ウラマーから「世俗的」ウラマーへの変質である。それに伴い、組織では非ウラマーであるテクノクラートの存在が大きくなった。その背景には組織内で選挙が行われるようになったためテクノクラートが幹部になる可能性がでてきたこと、ま

たハウザでテクノクラートを養成して閣僚として国家権力中枢に送りこもうとする傾向があることが挙げられる。

本発表は、今日の「シーア派イスラーム運動」が大衆運動化することに伴うさまざまな事象のなかに伝統的シーア派と異なる､「シーア派イスラーム運動」の共通要素を見出そうとするものであった。質疑応答では特に、イランのハウザとイラク、レバノンのハウザの違いが問題になった。いずれにせよ、松永氏の発表と併せて考えるならば、ペルシア語圏シーア派研究とアラビア語圏シーア派研究の垣根が外されたという意味で有意義な研究会であった。

（編集部）

**KIAS ユニット 5「イスラーム経済・特別レクチャー」シリーズ**
**「現代イスラーム金融入門」**
**（2007 年 5 月 22 日～ 7 月 3 日　於京都大学）**

講義内容：“An Introductory Course on Islamic Banking and Finance”（現代イスラーム金融入門）
講師：サルマ・サイラリー（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員准教授、 KIAS 拠点研究員）

本講義は、KIAS 教育プロジェクト「イスラーム世界の国際組織をめぐる大学院教育」の一環として、モーリシャス財務省経済分析官でアジア・アフリカ地域研究研究科客員准教授のサルマ・サイラリー氏を講師に迎え行われた。近年、世界的に拡大を続ける現代イスラーム金融の理論的思想的背景や歴史的変遷を紹介するだけではなく、最新の研究動向や現代イスラーム金融の現状も扱われ、現代イスラーム金融研究に必要な専門的知識と分析視角の修得が目指された。なおこの講義は KIAS ユニット 5「イスラーム経済」の研究活動とも連動している。講義内容は以下の通り。

講義内容
1．現代イスラーム金融の基本原則
2．イスラーム法と現代イスラーム金融の金融手法
3．イスラーム金融商品の概観
4．スクーク（イスラーム証券）のしくみ
5．現代イスラーム金融におけるアセット・マネージメント
6．タカーフル（イスラーム保険）のしくみ

報告者：長岡慎介（京都大学）

**KIAS・ASAFAS 連動講義「南アジア・イスラーム論」**
**（2007 年 6 月 8 日～ 7 月 13 日　於京都大学）**

講師：山根　聡（大阪外国語大学准教授、 KIAS 拠点研究員）

2007 年 6 月 8 日(金)から 7 月 13 日(金)の毎週金曜日に､京都大学工学部 4 号館 4 階 AA415(第

2 講義室）において、KIAS との連動で大阪外国語大学山根聡准教授を講師に迎え「南アジア・イスラーム論」が開講された。本講義は南アジアにおけるイスラームの過去と現在を講ずることで、現代イスラーム世界におけるイスラーム復興運動の実体に南アジアから光を当てることを目指したものである。なお山根氏は KIAS ユニット 2「中道派」のユニット責任者でもある。

各回の講義内容は以下の通りである。

第 1 回　南アジアのイスラームを学ぶために
第 2 回　ムスリムの見た「インド」：イスラーム史に現れるインド（ムガル朝以前）
第 3 回　イスラームの広がり：スーフィー
第 4 回　インド文学とイスラーム
第 5 回　南アジアにおけるイスラーム復興

南アジアのイスラームは、その深淵な歴史的変容、豊穣な文化的遺産、そして宗教的誠実さにもかかわらず、これまでイスラーム世界全体のなかで正当な認識と評価を獲得してこなかったと言っても過言ではない。しかしながら、現代イスラーム世界におけるイスラーム復興の潮流を見るにつけ、南アジアから発信されるイスラームの重要性は日増しに大きくなっていることは間違いない。南アジアとイスラームの関係を、過去と現代の歴史的変遷、および他地域との比較の中から浮き彫りにすることは、今日のイスラーム理解に緊要な課題である。山根氏による本講義は、このような要請に十分に応える刺激に満ちたものであった。たとえばイスラームの伝播にともなって南アジアにもたらされた最大のものは「文字の価値」であり、イスラームが「文字」の価値を尊重し、史料を残して歴史を記述する「記録する文化」をもたらしたことが南アジアに文化的豊穣さをもたらし、学問的進歩を促進したとの指摘にはハッとさせられた。

報告者：平野淳一（京都大学）

**SIAS グループ 3・KIAS ユニット 4 共催　研究会**
**（2007 年 6 月 23 日　於京都大学）**

発表題目：「インド世界とイスラーム―聖者チャイタニヤの伝記文学から」
発表者：外川昌彦（広島大学大学院国際協力研究科）

外川昌彦氏による発表は、「ヒンドゥー教」概念の成立に関するものであった。本発表では特に、クリシュナ・バクティ運動の推進者であったチャイタニヤ（チョイトンノ）の伝記文学をもとに、「土着の宗教」としてのヒンドゥーが、イスラームとの関わりの中で自覚されていった様子が明らかにされた。

外川氏はまず始めに、イスラームのスーフィズムがバクティ運動に影響を与えていたことに言及し、聖者信仰を通してシンクレティズム論を考える重要性について述べた。続いて、現代インド世界を特徴付けるコミュナリズムが、植民地時代よりも古い起源を持つ現象であることを示唆したベイリーの学説を紹介した。そしてこれらの議論をもとに、外川氏は概念としての「ヒンドゥーイズム」が西洋キリスト教世界との接触によって生み出されたとする従来の学説に疑問を呈し、15 ～

16 世紀のベンガルにおけるヒンドゥー教徒とムスリムとの関係性の中に、その萌芽がすでに観察される事実を指摘した。

本発表はこれらの問題群の中でも、最後に提起された中世ベンガルの伝記文学における「ヒンドゥー」の用法と意味に関する考察を中心に進められた。研究にあたって分析対象とされた資料は 2 点ある。1 つはチャイタニヤの没後十数年を経てブリンダボン・ダスによって書かれた『チョイトンノ・バゴボト』、もう 1 つはその 70 年後にクリシュノダス・コビラージによってまとめられた『チョイトンノ・チョリタムリト』である。資料の特徴としては、前者がチャイタニヤの日常や交友の記述を中心としており、後者では事跡の記録に加えて真理に関する議論も見られる点が挙げられる。

資料の比較では、中世ベンガルの人々が宗教としての「ヒンドゥー」という概念を共有していたかどうかが詳細に検討された。先に成立した行伝では宗教としてのヒンドゥーの用法が明確には見られないのに対し、後で書かれた伝記にはそれが顕著に現れてくる。そして、それらの背景では常にイスラームに対抗するヒンドゥーという、宗教的な緊張関係が存在していると結論付けられた。

質疑応答ではまず、後に書かれた資料の方により哲学的な議論が展開されている理由として、当時その勢力を拡大しつつあったムガル帝国の影響が無視できないとするコメントがあった。また、宗教間対立がチャイタニヤの生きた 16 世紀から顕在化し始めたのか、それともそれ以前から存在していた問題であったのか、コミュナリズムを本質化することの危険性と絡めて問う発言もあった。それに対して外川氏は、コミュナルな状況が特定の歴史的過程で生じたのか、時代を超えて普遍的に存在し得る問題なのかどうかは、今後さらに慎重に検討していく必要性があるとコメントした。

今回の発表では、これまでのインド研究においてヒンドゥー研究者の内部のみで閉じていた議論に対し、イスラーム地域研究の視座を導入しようという意欲的な試みが示された。またイスラーム地域研究に携わる者にとっても、インド研究における成果からヒンドゥーとムスリム民衆の関係が検証されたことで、複合現象としての「スーフィズムと民衆イスラーム」のより総合的な理解が可能になった。新たな研究手法を取り入れることで、本研究はポストコロニアル時代のヒンドゥー研究およびイスラーム地域研究に一石を投じるものであったといえる。

報告者：朝田　郁（京都大学）

題目：「パキスタンの聖者信仰に関する文化人類学的研究―師弟関係と霊魂観からみた宗教世界の一考察」
発表者：水野裕子（広島大学大学院国際協力研究科）

外川氏発表と同様 SIAS グループ 3「スーフィズムと民衆イスラーム」と KIAS ユニット 4「広域タリーカ」が主催するスーフィー・聖者研究会本年度第一回研究会での発表である。このスーフィー・聖者研究会第一回研究会でのテーマは南アジアのスーフィズム・タリーカであり、外川氏の発表が文献学的歴史学的な方向からなされたのに対して、水野氏の発表は人類学的フィールド調査の調査結果をもとに行われた。

発表者はパキスタンのラホールにある 4 つの聖者廟をフィールド調査の対象とし、その四つの聖者廟でルーフや夢がどのような役割を果たしているのか、ルーフ（霊魂）や夢を媒介としてピール（導師）とムリード（弟子）あるいは、ピールと一般の人々との関係がどのように構築されているのかを調査した。その調査結果が本発表である。

ピールがすでに物故した聖者のルーフとつながりをもつことで、その弟子であるムリードが間接的に過去の偉大な聖者と関係をもつことができる。しかしそれ以外にもピールが過去の聖者のルーフと交感することの意義がある。たとえば聖者廟において、ピールは過去の聖者のルーフと通じることによって聖者の奇跡を現世で体現すると同時に自分の身の上に起こったさまざまな奇跡を人びとに語り、ピールと聖者との間に強い結び付きがあることを人々に対して印象づけている。他方、聖者のルーフに至るルートはピールだけにかぎられない。たとえば聖者の命日祭に行われるダマール（舞踏儀礼）や集団唱名のような行為を通じても人びとは聖者のルーフを感じることができる。このように過去の聖者のルーフとの交感は導師とその弟子の間の関係にかぎらず、聖者廟という場を中心としながら、もっと広い範囲でみられる現象なのである。

また人びとがルーフを経験する媒体として夢があることも指摘された。預言者や聖者、ピールが現れる夢は教訓や助言、警告、使命をあらわすものとされ、きわめて重要なものだと理解されている。（預言者・聖者・ピールの）ルーフは夢を通じて人びとに認識され、現実世界の生活にさまざまな影響を与えている。

発表者は、ルーフが聖者に関わる人々の活動の基層にあり、それが現実世界の人と人とのつながりを規定する大きな要素になっていると結論付けた。

その後の議論ではピールとムリードの師弟関係におけるルーフの位置づけ、さらにルーフが一般的にイスラーム世界でどのように考えられているかが問題となった。前者に関してはムリードが本当に依拠するのは師であるピールなのか、それとも過去の聖者なのかが議論された。後者に関してはルーフとは一体何なのか、そしてそれはパキスタン、ひいては南アジアに固有の現象なのか、そうではないのかが論じられた。これら二つの問題はいずれも即答することが不可能であるが、重要な問いであることが確認された。

「スーフィズムと民衆イスラーム」や「広域タリーカ」に関するこれまでの研究においてもルーフや夢の存在は認識されていたが、研究や議論の中心的な対象とはなってこなかった。本発表はパキスタンという特定の事例を扱いながらも、ルーフや夢を議論の中心へと持ち出した点で、今後の両者の研究に新たな方向性を与えるものである。

報告者：安田　慎（京都大学）

**NIHU プログラム　イスラーム地域研究**
**公開コロキアム／ 2007 年度第 1 回合同集会**
**（2007 年 7 月 7 日　於東京大学）**

**・第 1 セッション：帝国の異教徒／異教徒の帝国**

第 1 セッションの「帝国の異教徒／異教徒の帝国」は、支配者の宗教としてのイスラームと被支配者の宗教としてのイスラーム、さらに異教徒にとってのイスラームという 3 つの視点から帝国とイスラームの関係を問うという設定で行われた。そこでの帝国とは、既存の「帝国論」の立場で論じられる帝国ではない。「帝国論」をとりあえずカッコに入れて、地域研究の立場からアプローチしながら帝国という存在を語るという前提でセッションは進んでいった。

最初の発表は、濱本真実氏により「帝政ロシアのムスリム臣民――正教化政策と正教棄教問題を

中心に――」と題して行われ、帝政ロシア下において実施されたムスリムの正教会への改宗政策に付随する一連の諸問題の考察を通じて、帝国にムスリムがどのように同化していき、そこでどのようなアイデンティティを形成していったのかが論じられた。発表では、最も長期間かつ最初に帝国内に編入されたムスリム居住地域であるということから 1552 年以降から 19 世紀前半までの沿ヴォルガ・ウラル地方に焦点が当てられた。

同地域におけるロシア帝国のムスリム統治の方針は時代的に 3 つに大別される。第一にムスリムの宗教指導者を無視する一方、ムスリム上層階級を容認していた 16 世紀後半。第二にムスリムの上層階級をも排除しようと試みた 17 世紀後半。最後にエカテリーナ 2 世即位後、帝国によって宗教指導者を用い、柔軟な姿勢での同化政策を試みた 18 世紀末である。

発表者はこのような帝国側の政策に対し、被支配者であるムスリムの視点からこれらの政策への対応を論じる。ムスリム側はオスマン帝国などイスラーム王朝に対し援助を求める試みによって抵抗姿勢を見せるが、オスマン帝国側はヴォルガ遠征以降実質的な援助を拒否したため、ムスリムのロシア帝国内での孤立化が進んだ。しかし、エカテリーナ 2 世の時代になると柔軟な同化政策が採られ、ムスリムの側でもロシア帝国側と協力する宗教知識人が多数出現することとなった。全体としてみれば、徐々に同地域のムスリムにロシア人として意識が芽生え、ロシア・ムスリムとしてのアイデンティティが形成されるという流れにあったことは否定できないが、タタール商人がロシア帝国に協力する一方で、バシキール人が協力関係を放棄するなどムスリム側も一枚岩ではなく、対ロシア協調という点で民族的な差異があったことも併せて指摘された。

発表者によれば、ムスリムのロシア帝国への臣従を促す要因となったのは、皇帝による臣民としてのムスリム受容、つまり異教徒である帝国側からのコミットと、帝国内での正教会の国教としての影響力の弱さである。それらが、ロシア・ムスリムとしてのアイデンティティを形成するのみならず、宗教知識人のなかでロシアをイスラームの家（ダール・アル＝イスラーム）として考えるように促したのではないかと指摘された。

続いて、小沼孝博氏により「清朝と東トルキスタンのトルコ系ムスリム――北京・東安福胡同の記憶――」と題する発表が行われた。支配者側である清朝のトルコ系ムスリムに対する支配のあり方とその正当性の説明、また被支配者側であるトルコ系ムスリムから見た異教徒の支配者である清朝皇帝の支配という問題が、とくに 18 世紀中葉の北京城内におけるトルコ系ムスリム居住区の設置とモスク建設に注目して論じられた。

18 世紀半ばの清朝による東トルキスタン征服の結果、東トルキスタンが清朝の統治下に入ることになる。発表者によれば、清朝による異教徒支配の形態をオスマン帝国やロシア帝国などの他の帝国と比較した場合、国教なき帝国という特色が見られる。「異教徒」概念を創出しない清朝の支配理念とは、すべての人を平等に見て仁愛を施すこと、「一視同仁」の思想である。

支配者側からみた被支配者と帝国の関係に続き、被支配者側からみた帝国と支配者の関係が論じられる。東トルキスタンにおいて、その宗教的指導者層であったホージャ家の抵抗に見られるように、シャリーアの遵守による異教徒支配の打倒とイスラームの家（ダール・アル＝イスラーム）実現を唱える抵抗運動が実施された。その一方で、被支配者側には「公正な支配者」への信頼、恩義に対する忠誠の観念があり、異教徒の王であっても、必ずしも打倒すべき対象とはみなされず、その支配が受容されていく方向も存在した。

以上の東トルキスタンの清朝への編入に関する概観を示した後、北京のムスリム居住区における

モスク建設に関する碑文を手がかりに、清朝の統治理念を発表者は再検討する。同モスクは乾隆帝によって建設が指示され、宮廷財政から費用が捻出された。モスク建設の碑文は漢語、満州語、モンゴル語、ウイグル語の 4 言語で刻字されており、支配下の各集団の慣行を尊重し、強引な一元化を志向せず統合の実現を目指し、ムスリムに対してもほかの集団と同じく仁愛の心を示していることがうかがえる。その一方で各言語を比較した結果、公的な情報操作が見られ、そこに清朝の統治のしたたかさがあると指摘された。

第 1 セッション最後の発表は、秋葉淳氏による「ミッレト制論争再考――比較史的考察に向けて――」である。これまでの 2 本の発表が非イスラーム王朝におけるムスリムに着目した発表であったのに対し、この発表はイスラーム帝国における非ムスリム支配に着目した発表である。

まずミッレト制の辞典・事典項目における記述を紹介し、ミッレト制概念に混乱が見られることが指摘された。発表者は議論の前提として「ミッレト制」の古典的な解釈を (a) 起源・(b) 構造・(c) 特権（自治権）という 3 つの要素で分析する。古典的解釈では、ミッレト制は 1453 年のメフメト 2 世がコンスタンティノープルを征服した後に、それぞれのミッレトの長を任命し、特権を与えたことに遡り (a)、構造的には中央集権的であり (b)、スルタンが各ミッレト内での宗教的・行政的な自治を保証した (c) とされていた。

しかし発表者によれば、以上のような古典的な解釈は現在ではもはや通用しないという。発表者は、ミッレト制の古典的解釈に根本的な疑問を投げかけたベンジャミン・ブロードの説を紹介し、ブロードが「ミッレト」の用語と起源の問題を批判し、オスマン帝国は非ムスリムに対する一貫した政策や制度を持たず、中央集権的ではなかったと主張した ( つまり古典的解釈の (a) と (b) が否定された ) ことを確認した。続いて発表者は日本でのミッレト制の議論を概観する。日本では、ブロード説が概ね受容されており、宗派内自治については承認するが、中央集権的な制度としての「ミッレト制」を批判していることが述べられた。

こうした議論に対し、ミッレト制の枠組みを根本から批判し、「聖職者徴税請負制」論という新たな概念を提唱したマージド・ケナンオールの説が紹介された。彼は、ミッレトの長がいかに多くの権限を持っているように見えていても、それは帝国の法によって規定されており、あくまで帝国の法の範囲内にあったことを根拠にして、ブロード説が流布したのちもミッレトが有すると考えられてきた「自治」をも否定したのである（つまり古典的解釈の (c) の否定）。

最後に発表者は、本発表で論じられたような非ムスリムを支配する方法がオスマン帝国、あるいはイスラームに固有であるかのごとくに受け取られるかもしれないが、果たしてその制度がどの程度独特なものであるのかという問いを提示し、オスマン帝国以外との比較、ロシアのムスリム宗務協議会や植民地期のシャリーア法廷などとの議論の俎上に乗せれば、比較史的な考察が深まるのではないかと提言することで発表を締めくくった。

第 1 セッションは地域としては、ロシア、中国、トルコ、方法としては、歴史的推移の追跡、個別事例の評価、概念の再検討といった具合にバラエティに富み、全体のバランスもとれており、地域研究の幅広さとともに奥深さが感じられる理想的なセッションであった。

**・第 2 セッション：イスラーム地域研究における研究手法の開発**

第 2 セッションの「イスラーム地域研究における研究手法の開発―東大拠点による試みの紹介」

では、東大拠点で現在進行中のプロジェクトの中から、3つの研究手法について発表された。

最初の発表は、松本弘氏による「民主化研究のなかの中東――アプローチの模索――」であり、中東民主化データベース構築を中心とする東大拠点グループ2「中東民主化研究班」の活動が紹介された。しばしば、中東は「第三の波」に乗り遅れたと言われている。すなわち民主化への移行が進まず、民主化という方向からの評価が難しいとされてきたのである。80年代末から政治制度の変化が見られるものの、いずれも長続きせず、停滞・後退していったという現象面での原因がまず挙げられるが、「民主化研究」一般から見て、中東は例外的・参照的な位置づけしかされていなかったこともその大きな要因のひとつと考えられる。当研究は、そのようなマイナス面を補うため中東地域の横断的な比較を政治制度やその運用に着目しながら中東民主化データベースを構築し、中東地域の民主化の再評価を試みるものである。

しかし、そのように地域研究・比較という手法を導入したとしても研究の障害となる「4つのギャップ」が存在すると指摘する。第一に民主化への「外圧」と現状に対する各国の現状認識との間にあるギャップ、第二に世界的規模からの民主化達成評価と各国ごとの民主化達成評価の間にあるギャップ、第三に中東地域における各事例間のギャップ、第四に民主化研究と中東地域研究の間にあるギャップである。いずれも、「比較」と「地域研究」という手法によって生じる問題であり、いかにその乖離を乗り越えて、政治学における民主化研究を中東地域において行いうるのだろうか。そこに中東民主化研究の成否のカギがある。

発表者はそれに対して3つのアプローチを提示する。第一に、既存の理論や仮説の確認と応用、第二に地域に特有の問題の整理、そして第三に「新制度論」の適用可能性を探ることである。とりわけ、近年の政治学において議論されている新制度論を用いることにより、議会や選挙などの「フォーマルな制度」の変遷を評価し、さらに文化や習慣、価値観などの「インフォーマルな制度」を説明変数として組み込み、より客観的で比較可能な研究を進めることで上記のギャップが埋められるとの見通しが述べられた。

松本氏の発表に続き、宇山智彦氏から、東大拠点の作成している民主化データベースに対して重要であると評価する一方で、研究手法については、新制度論を用いることの問題点や疑問があるとのコメントがなされた。質疑応答ではおおむね、東大拠点の民主化データベースが中東地域のみならず、今後の比較政治学や民主化研究へも貢献するであろうと大きな期待が寄せられているさまがうかがわれた。

2番目の発表は、ティムール・ダダバエフ氏による「記憶の中におけるソ連――聞き取り調査の試み――」である。発表者は、ソ連時代を知る人々が物故していく中で、当時の記憶をどのように保存するか、また共産圏で聞き取りをするときの方法論と課題について、ウズベキスタンにおける調査を中心に論じた。

はじめに当研究の目的が説明された。まず、社会主義時代の出来事、人々の記憶に残ったエピソードや生活の様子を、インタビューを通じて記録する。それに基づいて、歴史上の出来事と、人々の日常生活や体験をすりあわせ、政治以外の場面で人々の生活がいかなるものであったのかについて検討する。さらに、ソ連崩壊に至った経緯を、人々の日常生活を通して分析する。以上を踏まえて、ソ連時代とその後の時期における多くのステレオタイプを壊し、時代の複雑さを指摘することが当研究の狙いである。

上記の目的を達成するため聞き取り調査では以下３つの手法がとられた。まず各家族の外部者によるインタビューではなく、家族内の話し合いを記録すること。ソ連時代のウズベキスタンに関する通念や通説を批判的に再検討すること。そして、語り手がソ連時代に語ったことをもとに、当時の日常を再現する一貫として、「参加型」の調査を実施することの３点である。
引き続き、このような調査を進めていく上で想定された課題が２点述べられた。1 点目は政治的なプレッシャーや人々のメンタリティーによって、本音を語ってもらうことが困難なのではないかということ。2 点目は、本音を聞き出すための外部者と内部者の協力体制をいかに築くかということである。

特に最初の課題を踏まえ、インタビュー方法は、ある程度厳密に決められた質問からなる質問票を作成した上で､回答者が答えたい項目だけに答えてもらうという方法を主に採用した。その結果、インタビューの内容が、質問が厳密に決められたアンケートや抽象度が高い質問票よりも興味深い結果が得られたこと、また、使用する言語によって回答の違いが見られることなど副次的な発見があったことが報告された。

最後にインタビューを実施したあとに見出された問題が 4 点述べられた。主要都市や人口密度が高い地域をサンプリングに反映させてはいるが、アクセスしにくい地域の回答者がいないこと、インタビューに応じてくれない人が想像以上に多かったこと、インタビューへの他者の介入、インタビューで得られた人々の「記憶」は本当に記憶なのか、というものである。

当研究によって行われた聞き取り調査およびその調査に対する反省はたんにソ連時代のウズベキスタンに存在した人々のありさまの研究として有益なだけではなく、広く、聞き取り調査一般の方法論に対しても有意義なものであると感じた。

本セッションの最後の発表は、小松久男氏と後藤寛氏による「フェルガナ・プロジェクト――GIS によるイスラーム地域研究の試み――」である。本研究は、初期のイスラーム地域研究から継続されているプロジェクトであり、GIS（地理学情報システム）を用いて中央アジア・フェルガナ盆地の状況を視覚的に描写する試みである。フェルガナ盆地は、中央アジアの面積のわずか５%を占めるに過ぎないが、20%の人口を占める地域である。複雑な民族構成をともない、19 世紀以降、中央アジアの重要な政治変動の中心となってきた。

今回の発表では、ソ連時代の統計資料や地形データを融合し、フェルガナ盆地の歴史的な状況を地図によって示していた。なかでも、民族構成の変化や水路と農村の配置など、フェルガナ盆地を規定する重要な視点を､理解しやすい形で提示している｡こうしたGISを利用した地域研究は､文献･統計・映像を統合するなかで地域の動態を理解し、新たな研究視角を発見するものである、との言で発表は締めくくられた。続く質疑応答のなかでは、GIS の利用目的と研究との関係について、今後のプロジェクトの発展に有益な提言がなされた。

第２セッションでは地域研究に対する野心的な試みが３つ紹介された。どれも新たな研究領野を開拓していく試みであり、これからの研究が待ち遠しくなる、そのような研究であることが十分に察知された。第１セッションと第２セッションともに東大拠点の研究の充実ぶりを示す素晴らしいコロキアムであったと聴衆の誰もが感じたに違いない。

報告者：黒田賢治・堀抜功二・丸山大介（京都大学）

**KIAS ユニット 1「国際関係」の研究会**
**（2007 年 7 月 18 日　於京都大学）**

発表題目：The Shiites in Iran, Iraq and the Gulf : with a Special Reference to Iran/Iraq Connections with the Shiites in the Gulf Countries
発表者：Juan Cole（ミシガン大学）

京都大学イスラーム地域研究センター（KIAS）ユニット 1（国際関係）の研究会が 2007 年 7 月 18 日に京都大学で行なわれた。同研究会は、インドからイランにわたるシーア派世界の歴史研究で有名なホアン・コール氏（ミシガン大学）を招聘し、2003 年イラク戦争後のイラクと湾岸地域におけるシーア派の動向を分析していただいた。

コール氏のもともとの専門は、北インドのアワド朝の文書研究、同朝からイラクのアタバート（ナジャフ、カルバラー、カーズィミーヤ、サーマッラーのシーア派四聖地）への資金流通をはじめとするウラマーのネットワークにかんする歴史研究である。カリフォルニア大学ロサンゼルス校でニッキー・ケディー女史に師事したことからも分かるように（議論の方向性にかんしては女史とは若干異なるという印象を受けるが）、イランやシーア派についても多数の論考を残している。また、宗教学も修めていることから、イスラームにかんしてはもちろんのこと、日本仏教についても造詣が深い。また、同氏は北米中東学会の前会長や、International Journal of Middle East Studies の編集委員を 5 年間務めるなど、国際的にも名高い。

そんな彼を歴史研究のサークルを超えて有名にしたのは、2003 年イラク戦争以降に彼が始めたブログであろう。単なるブログではない。それは、イラクにかんする膨大な報道を選別し、分析を加える極めて学術的なデータベースである（コール氏のブログにかんしては、Juan Cole, Informed Comment（http://www.juancole.com/）を参照のこと）。それゆえに、毎日更新される彼のホーム・ページは多くの研究論文や書籍で引用されるほどになり、自身は名実ともにイラク政治の専門家になったのである。

以上のような経緯で、歴史研究者がイラクと湾岸の現代政治を分析することになった。本報告の課題は、イラク戦争後のイラクにおけるシーア派の台頭が、湾岸諸国にどのようなインパクトを与えたかを明らかにすることであった。

彼が着目するのは、イラクにおけるシーア派宗教界、なかでも最高権威のアリー・スィースターニーの役割である。スィースターニーは米軍の占領に一貫して反対し、イラク国民の主権を認めた民主的な選挙の実施を呼びかけた。コール氏によると、このようなスィースターニーの姿勢は、イラク国内においてシーア派宗教界の支持を強固にしただけではなく（2003 年イラク戦争後のイラク国内におけるスィースターニーの政治的役割とその推移に関しては、拙稿「戦後イラクの政治変動とシーア派最高権威の国民統合論：スィースターニーのファトワーから」『イスラーム世界研究』（1/2）を参照）、周辺湾岸諸国におけるシーア派の運動を活性化させた。

シーア派が 3 分の 2 を占めるバハレーンにおいては、アリー・サルマーンを中心とするシーア派の政治的権利の拡大を要求する動きや、米国のイラク占領を批判するデモなどが頻発した。サウディアラビアでは、東部の産油地域に集住するシーア派の政治参加を求める動きが活発になり、それが 2005 年 3 月の地方評議会の形成とその選挙実施に結実した。

コール氏の議論が興味深いのは、スィースターニーによるシーア派の政治動員というトランスナ

ショナルな影響が、湾岸各国の国内レベルにおいては、ナショナルなレベルでの政治動員に帰結しているという分析であり、イランよりもイラクのほうが湾岸諸国のシーア派に対して大きな影響力を持っているという指摘であった。

報告後は活発な質疑応答がなされ、激動のイラクと湾岸にかんする非常に興味深い研究会となった。

報告者：山尾　大（京都大学）

**拓殖大学イスラーム研究所・KIAS 共催　イスラーム銀行・金融研究レポート**
**（2007 年 7 月 20 日　於拓殖大学）**

報告１：イギリスにおけるイスラーム銀行
報告者：セイフッディーン・ターグッディーン（英国マークフィールド高等学院教授）
報告２：マレーシアにおけるイスラーム銀行）
報告者：アブドゥッラヒーム・アブドゥッラフマーン（マレーシア・イスラーム国際大学准教授・同大イスラーム銀行・金融研究所所長
報告３：湾岸（ドバイ）におけるイスラーム金融
報告者：ジョン・パトリック・ウィリアム・フォスター（ドバイ・イスラミック・ビジネス＆ファイナンス副編集長）

＊いずれの報告とも日本語通訳付き

**拓殖大学イスラーム研究所・KIAS 共催　第 5 回イスラームセミナー**
**（2007 年 7 月 21 日　於拓殖大学）**

テーマ：イスラーム銀行・金融の仕組みとその展望：啓典クルアーンの教義に立脚したイスラーム銀行・金融の手法を解明する

報告１：イスラーム金融と日本
報告者：武藤英臣（拓殖大学イスラーム研究所客員教授・シャリーア専門委員会委員長）
報告２：シャリーアの規則とイスラーム銀行の歴史的発展
報告者：サルマ・サイラリー（モーリシャス財務省経済分析官・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員准教授・KIAS 拠点研究員）
報告３：イスラーム金融業の成長と現在の進展
報告者：メフメット・アスタイ（英国・ダーラム大学教授）

＊いずれの報告とも日本語通訳付き

＜報告（20 日、21 日両日とも）＞

拓殖大学イスラーム研究所と KIAS ユニット 5「イスラーム経済」が主催する現代イスラーム金融関係の研究セミナーが、現代イスラーム金融研究を国際的に牽引している研究者および著名な雑

誌の編集者を招聘して二日間にわたって拓殖大学で開催された。20 日の 「イスラーム銀行・金融研究レポート」は研究者・実務家に対して、イギリス、マレーシア、湾岸諸国の現代イスラーム金融の実態について歴史的概観と現況が紹介された。21 日の「イスラームセミナー」では、より一般の聴衆を対象に、現代イスラーム金融の実態とそれを支える諸原則についての紹介が行われた。日本では現代イスラーム金融の実践への取り組みはようやく始まったばかりであり、まだまだ認知度が少ないが、現代イスラーム金融研究の最先端の現場にじかに触れることのできる我が国初の機会であったことから、両日とも多くの聴衆に恵まれ、フロアからも活発な質問がなされた。

報告者：長岡慎介（京都大学）

**ユニット 5　イスラーム経済・国際シンポジウム**
**（2007 年 7 月 23 日　於京都大学）**

タイトル：Islamic Economics: Theoretical and Practical Perspectives in a Global Context

開会の辞：Kosugi Yasushi
セッション 1 （座長：Mehmet Asutay）
報告 1 ：Islamic Revival and the Rise of Islamic Banking
報告者：Kosugi Yasushi（Kyoto University）
報告 2 ：Community Development Financial Institutions: Lessons in Social Banking for the Islamic Financial Industry
報告者：Salma Sairally（Kyoto University）
セッション 2 （座長：Seif El-Din Ibrahim Tag El-Din）
報告 3 ：Islamic Economics as an Alternative for the Current Capitalist World Economic System
報告者：Mehmet Asutay（School of Government and International Affairs, Durham University）
報告 4 ：Divergence or Convergence? An Overview of Theoretical Discussions in Islamic Finance
報告者：Nagaoka Shinsuke（Kyoto University）
セッション 3 （座長： Salma Sairally）
報告 5 ：Islamic Capital Markets: Its Relevance and Potential
報告者：Seif El-Din Ibrahim Tag El-Din（Markfield Institute of Higher Education）
報告 6 ：Islamic Microfinance: A Missing Component in Islamic Banking
報告者：Abdul Rahim Abdul Rahman（IIUM Institute of Islamic Banking & Finance）
報告 7 ：Islamic Banking in Pakistan: Developments and Transformation
報告者：Mehboob ul-Hassan（Nagoya City University）
全体討論（座長： Salma Sairally）
閉会の辞：Abdul Rahim Abdul Rahman

本シンポジウムは、イスラーム経済研究および現代イスラーム金融研究の分野において世界的に活躍している研究者を招いて開かれた我が国初のイスラーム経済を主題とした研究シンポジウムであることをはじめに記しておきたい。タイトルからもわかるように、本シンポジウムは、世界的に

拡大しつつある現代イスラーム金融の実態を把握するだけではなく、そのような実践を支える理論的・思想的背景を踏まえながら、理論・思想と実践の間の動態的なインタラクションとして現代イスラーム金融を捉え、そこからイスラーム経済の特質を探究することを目的として開催された。

KIAS ユニット 5 ユニット責任者の小杉泰氏による報告 1 では、本シンポジウムの趣旨が説明された後で、イスラーム復興運動の潮流における現代イスラーム金融の位置づけを行いながら、そのような現代イスラーム金融の理論と実践を動態的に捉え、イスラーム経済の特質を探究していくための方法として「教経統合論」が提起された。続いて、サルマ・サイラリー氏による報告 2 では、近年注目が集まっている現代イスラーム金融における社会的投資の実態とその役割に関する考察が行われた。そこでは、現代イスラーム金融の新たな発展の方向性としての社会的投資の重要性が説かれ、そのような発展と現代イスラーム金融がそもそも掲げてきた理念とがきわめて親和的であると指摘された。

メフメット・アスタイ氏による報告 3 では、現代イスラーム金融の理論的・思想的バックボーンとなっている学問領域であるイスラーム経済学におけるイスラーム経済の理念が概観された。そして、現代イスラーム金融の実態とイスラーム経済の理念とのギャップを埋めるために、サイラリー氏が報告 2 で取り上げた社会的投資のような新たな局面に現代イスラーム金融の実践が舵を切る必要があるとともに、理論面においても単なる法解釈に拘泥した理論の提示ではなく目的論的な視点からの理論構築が必要であることが論じられた。続いて、長岡慎介氏による報告 4 では、アスタイ氏が述べた現代イスラーム金融の実態と理念とのギャップの事例として、ムラーバハ契約とイスラーム証券をめぐる理論的論争を取り上げ、それらの論争が単に理論と実践の対立を生んだだけでなく、地域間の実践の多様性をも生み出したことが指摘された。しかし、そのような対立や地域的多様性は現代イスラーム金融の理念を切り裂くような本質的な対立なのではなく、共有された同一の理念の認識のされ方の違いに由来することが明らかにされた。

セイフッディーン・ターグッディーン氏による報告 5 では、近年、拡大が進んでいるイスラーム資本市場の具体的なしくみが概観され、そのような資本市場を可能とする理論的枠組みが考察された。さらにイスラーム資本市場の特質として、投資先の選定がより重要な意味を持つこと、アセット・ベース型の金融により特化した金融商品が取り扱われていることが挙げられた。続くアブドゥッラヒーム・アブドゥッラフマーン氏の報告 6 では、貧困削減や社会的エンパワーメントの有力な手段として注目を集めているマイクロ・ファイナンスに対する現代イスラーム金融からの応用可能性について考察が行われ、現代イスラーム金融が依拠する金融手法のプロセスの中には、マイクロ・ファイナンスの目的に資する多くの要素が内在していることが指摘された、それとともに、マイクロ・ファイナンスへの進出が現代イスラーム金融の発展と理念の実現にとっても重要な局面を切り開く可能性があると論じられた。最後のメフブーブ・ウル＝ハッサン氏による報告 7 では、パキスタンにおける現代イスラーム金融の歴史的潮流が取り上げられた。パキスタンでは、1980 年代に経済システムの包括的イスラーム化が試みられたが、失敗に終わった。メフブーブ氏はその要因をイスラーム化に対する具体的政策プログラムの欠如にあることを指摘するとともに、2000 年以後のパキスタンにおける現代イスラーム金融の新たな展開とその展望についてデータを用いながら検討を加えた。

各報告および最後の全体討論の場においては、報告者どうしあるいはフロアからの積極的な意見交換が行われた。その内容は、現代イスラーム金融で用いられる金融商品の具体的な取引方法から、世界経済における現代イスラーム金融の位置づけ、現代イスラーム金融における理論と実態の

ギャップ克服への具体的方策、イスラーム経済の理念の実行可能性、多くの研究で多義的に用いられている Islamic Economics という用語の定義の問題など、きわめて多様なトピックに渡り、現代イスラーム金融研究、そしてイスラーム経済研究の奥行きの深さと関心の高さが垣間見られた。

報告者：長岡慎介（京都大学）

**SIAS グループ 3・KIAS ユニット 4 共催　研究合宿**
**（2007 年 7 月 26 日～7 月 27 日　於上智軽井沢セミナーハウス）**

発表題目：「fikr をめぐる諸言説の思想史的考察―世界へ向かう思考と自己へ向かう思考の間」
発表者：加藤瑞絵（東京大学大学院人文社会系研究科）

上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究拠点・研究グループ 3 と京都大学イスラーム地域研究センター・研究ユニット 4 共催で「スーフィズムとサラフィズム」をテーマに合宿が行われた。

加藤氏による発表はスーフィズムとサラフィズム双方の思想的淵源となる可能性を秘めたフィクル――語義的には「思考」を意味する――概念に焦点をあて、古典期においてフィクル概念がどのように展開していったかを探るものであった。まず、フィクルには自己についての省察と世界についての考察という 2 つの意味があるとするガザーリー (d.505/1111) の定義を確認し、後者の定義が、「威厳の書」(Kitab al-`azama) のタイトルを有する自然学関係の諸作品の影響によるものとされていることを踏まえた上で、ガザーリーがタサウウフのテクニックとして重視した自己の内面へと向かうフィクルがいつ頃から語り出されるのかという問いが立てられ、ガザーリー以前の思想家たちのフィクル概念が、詳細かつ精確に分析された。具体的にはムハースィビー (d.243/857)、マッキー (d.386/996)、フジュウィーリー (d.465-469/1072-1076)、クシャイリー (d.465/1072) というガザーリー以前の四人のスーフィー思想家のテクストが取り上げられ、他方で「威厳の書」ジャンルにおけるフィクルの用例の洗い直しという意図の下、アブー・シャイフ (d.369/979) の『威厳の書』も分析の対象とされた。

ムハースィビー、アブー・シャイフ、マッキー、フジュウィーリー、クシャイリーそれぞれのフィクル概念が時系列的に整理され、フィクル概念の思想史的展開が次のようにまとめられた。すなわち、自己の内面へと向かうフィクル概念は、ムハースィビー、アブー・シャイフ、マッキーの諸書においてすでに語られているが、ガザーリーの直接のソースと言われることの多いマッキーにおいてもフィクルそのものへの言及が減少している。フジュウィーリーやクシャイリーに至っては、外界へ向かうフィクルの用例が僅かに見られるだけとなった。このことから加藤氏は、ガザーリーが、自己の内面へ向かうフィクルを重視して、外界へ向かうフィクルとともに詳細に記述したのは、それまでの趨勢に逆行するものであり、そこにそれまでとは異なるガザーリーの倫理的思索の方向性が表れているのではないかと提起することで論を結んだ。

質疑応答では、最終的にガザーリーへ至るフィクル概念の思想史的展開の系譜に、取り上げられた思想家たちが相互にどのように関わるのかをめぐり議論が交わされた。また、外界へと向かうフィクル概念がタサウウフの伝統の中で練り上げられたことに鑑み、ギリシア哲学起源ではないタサウウフ起源の自然学が存在した可能性があるとの展望の下に、ガザーリー以降のフィクル概念の展開

を探る必要があるとの指摘がなされた。

19 世紀に展開された狭義のサラフィズムに限らず、イスラームの復興・改革の動きは何時の時代にも存在した。今回の合宿を通じて確認されたように、それらの動きがそれぞれどのように異なるのかという問題は今後検討されねばならない。であれば、イスラーム改革の動きのひとつに数えられるガザーリーの思想的営為を正しく捉えることが極めて重要であることは言うまでもなく、その意味でガザーリー思想のキー概念であるフィクルの思想史的展開をめぐって徹底的に分析を行った加藤氏の発表は重要な試みであった。

報告者：中西竜也（京都大学）

文献発表①

発表者：朝田　郁（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

論文：Martin van Bruinessen. “Controversies and Polemics Involving the Sufi Orders in Twentieth-Century Indonesia”, in F. de Jong & B. Radtke eds., *Islamic Mysticism Contested: Thirteen Centuries of Controversies and Polemics,* Leiden: Brill, 1999. pp. 705-728.

Bruinessen は本論文で、現代インドネシアのイスラーム改革主義運動下における、スーフィズムとタリーカをめぐる論争の主体を扱っている。発表者は、論文を再構成し項目別に分けることで、論文内容を明瞭なかたちで紹介した。本論文は、インドネシアとヒジャーズが密接な関係を保っており、ヒジャーズへの留学者が帰国して、改革をもたらすという構造があり、それが積み重なることによって、インドネシアのイスラームが多層化されていることを指摘する。そのうえで、改革主義とタリーカの関係を見定めようとする。西スマトラのウラマー、アフマド・ハティーブ (d.1915) によるナクシュバンディー教団批判、急進的改革派である kaum muda（若い世代）による教団の実践への批判、ムハマディヤやイルシャードといったジャワの改革派組織のタリーカに対する態度、独立前後の政治化するタリーカ問題の動向、インドネシアのシンクレティズムとタリーカの関係など多岐にわたる話題を提供しつつ、Bruinessen は、本論文の主題である論争の主体に関して、総体的に見て、従来指摘されてきた「スーフィー対改革主義者」という構図よりもタリーカのシャイフ間の対立構図の方が際立っていたと結論付けている。

発表後の質疑応答、およびディスカッションでは、本論文について参加者から、情報量の多さは評価できるが、単なる事例の羅列に終わっているのではないかとの指摘がなされた。また、情報が多かったにもかかわらず、Bruinessen が導いた結論と提示事例との関連性が希薄であった点も指摘された。さらに、本論文と、合宿のテーマであった「スーフィズムとサラフィズム」との関連についても、論文中にはサラフィズムへの言及がなく、本論文はタリーカをめぐるインドネシア国内の論争とその背景に関する事例を単に羅列しているだけであったとの意見が出された。

報告者：木下博子（京都大学）

文献発表②

発表者：茂木明石（上智大学大学院外国語学研究科）

論文：Frederick De Jong, “Opposition to Sufism in Twentieth-Century Egypt[1900-1970], ” in F. de Jong & B. Radtke (eds.), I*slamic Mysticism Contested: Thirteen Centuries of Controversies and Polemics*, Leiden: Brill, 1999. pp. 310-323.

本論文は、19 世紀後半から 1970 年までのエジプトにおけるスーフィズム批判を通史的に扱ったものである。ここでは、茂木氏の発表に従って本論文の内容を概略的に紹介し、その後で質疑応答およびディスカッションの内容をいくつか紹介する。本論文によれば、19 世紀のエジプトでは、スーフィズムに対する批判は教義的側面ではなく、宗教実践における楽器の使用や危険な行為などの慣習的行為に向けられていた。19 世紀後半に政府主導でスーフィー教団の行政面・組織面の改革が実施されたが、これらの改革は、スーフィー教団の指導者の利益を保護するものであったため、教団側からの抵抗はなかった。しかし 20 世紀の初頭からムハンマド・ウマルやムハンマド・アブドゥ、ムハンマド・ハッターブ・アル＝スブキーが本格的にスーフィー教団批判を始めることとなった。20 世紀半ばからはまた新たな局面が生じ、政府はムスリム同胞団に対抗するために、スーフィー教団を政治的に利用し始めることとなった。そしてその後も、スーフィー教団は、政府に政治的に利用され続けた。

発表後の質疑応答・ディスカッションでは、本論文の内容そのものよりも、エジプトのスーフィー教団の現状に関する議論が行われた。例えば、参加者から、ムスリム同胞団とスーフィー教団が「イスラーム復興」に関して協力関係にある可能性はないのかという意見が出た。しかし、基本的に両組織が敵対関係にあるエジプトの現状からは、民衆レベルで両組織にコミットしている人々がいる事例があったとしても、その事例をもって両組織に協力関係があると見なすのには無理があるとの反論がなされた。また、両組織の間に協力関係があるとする仮説を証明するためには、フィールド調査の方法論を含めて、困難な問題が多くあることが指摘された。

報告者：新井一寛（大阪市立大学）

文献発表③

発表者：東長　靖（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）

論　文：Itzchak Weismann, “Law and Sufism on the Eve of Reform: The Views of Ibn ʿAbidin,” Itazchak Weismann and Fruma Zachs (eds.), *Ottoman Reform and Muslim Regeneration: Studies in Honour of Butrus Abu-Manneh*, London and New York: I.B. Tauris, 2005, pp. 69-80.

本論文は、オスマン朝タンズィーマート期のサラフィーヤによる改革運動の先行者として、19 世紀初頭のシリアの法学者イブン・アービディーンに注目する。19 世紀のオスマン朝において、サラフィーヤはイスラームの合理性と信仰の原理的統合を主張し、当時の社会に浸透していた伝統的な法学のあり方とスーフィズムを、ビドア（逸脱）として批判した。しかし前タンズィーマート期において法学者がスーフィズムと手を携え、サラフ時代のモデルと一致するようなムスリム社会を作り、難局を乗り切ろうとしていた事例がある。それがスーフィズムに関心のある法学者イブン・アービディーンとシャリーアへの嗜好性を持つスーフィー、ハーリド・バグダーディーの協働関係である。事実、イブン・アービディーンは、サラフィーヤが批判することになるイブン・アラビーや聖者廟参詣、ハーリド・バグダーディーを擁護する論文を数多く出版している。本論文の結論は、こうしたイブン・アービディーンの一連のスーフィズム擁護から、彼が、スーフィズムは本来的に変化に対応できる力を有しており、近代化に対応する力があると考えていたというものであった。

発表後のディスカッションの中心となったのは、サラフィーヤと近代の関係に関してであった。参加者からは、サラフの考えは近代以前にも根強くあったものであり、19 世紀特有のものではないという意見が出た。この意見を受けて、当事者が生きた時代以前を否定し改革するための装置と

して、「サラフ」概念が通時代的にたびたび使用されてきたのではないかという意見も出た。また、その点から、サラフィーヤは近代の制約は受けたが、その考えや概念は、時代を超えて通底するのではないかという意見も出された。また、こうしたサラフィーヤの通時代性だけではなく、通地域性についても指摘がなされた。本論文は特定の時代・地域を扱ったものであるが、上記の議論をふまえて、今後通時代的な「サラフ」概念について考察していくことで、サラフィーヤに関する議論に新たな方向性を示せるのではないかと考えられる。

報告者：安田　慎（京都大学）

文献発表④

発表者：赤堀雅幸 ( 上智大学アジア文化研究所 )

論文：Muhammad S. Umar, “Sufism and its Oponents in Nigeria: The Doctrinal and Intellectual Aspects,” F. de Jong & B. Radtke (eds.), *Islamic Mysticism Contested: Thirteen Centuries of Controversies and Polemics*, Leiden: Brill, 1999, pp. 357-385.

西アフリカ（特にナイジェリア）のスーフィズムの政治的経済的な側面は従来の研究で扱われてはいるものの思想的な側面はあまり注目されてこなかった。本論文は 19 世紀初頭から現代までの文献を紐解くことでスーフィーの思想的側面に光を当てようとする。当該地域のスーフィズムをめぐる歴史は大きく 2 つの時代に分けられる。① 19 世紀初頭から 20 世紀前半までのタリーカ同士が覇を競う時期と② 20 世前半から現代まで続く反スーフィズムを掲げるウラマーとスーフィズム勢力が対抗する時期である。

①の時代は以下のようにまとめることができる。ソコト・カリフ国の創設者 Usman dan Fodio (d.1817) が排他的にカーディリーヤを称揚して以来、当該地域はカーディリーヤ教団の独占状態だった。しかし 19 世紀前半から次第にティジャーニーヤ教団が浸透しはじめ、1920 年代から 1960 年代にいたるまでの間にはティジャーニーヤ教団がカーディリーヤ教団を駆逐するほどまでに勢力を拡大し、かつてのカーディリーヤ教団と同様の主張、つまりティジャーニーヤが他の教団よりも優れていると主張しはじめた。だがこの少し前（1900-1920）に Usman dan Fodio の系統とは異なるカーディリーヤ教団が出現し、このカーディリーヤ教団とティジャーニー教団はその後対立関係に入ることとなった。この対立関係のなかで互いに相手を批判する論駁書が数多く著されたのである。

②の時第は、20 世紀の前半にスーフィズム全体を批判するウラマー勢力が生まれたことに始まる。この反スーフィズム勢力に対抗するため、カーディリーヤ教団とティジャーニー教団は次第に協力するようになり、反スーフィズム対スーフィズムの対立図式のなかでも互いに批判する論駁書が書かれた。

問題は①と②の時期が重なっていることであり、20 世紀前半には複雑な対立関係が生まれている。この時期に書かれた論駁書およびその後の反スーフィズム対スーフィズムの文脈でなされる言説の分析がこの論文のメインテーマとなっている。

発表後の質疑応答・ディスカッションでは、本論文の内容そのものよりも、ティジャーニーヤ教団の現状に関する質問が出た。アルジェリアにある同教団の本拠地と世界各地に広がる同教団は関係があるのか、エジプトの同教団は同本拠地と関係があるのかとの質問に対して、世界各地のティジャーニーヤ教団は指導者レベルでも構成員レベルでもネットワークが形成されており、エジプト

のスーフィー教団も、アルジェリアの同本拠地を意識して活動を行っていることが調査によって判明しているとの情報が示された。

報告者:新井一寛（大阪市立大学）

文献発表⑥

発表者：二宮文子（京都大学大学院文学研究科）

論　文：A. F. Buhler, “Charismatic Versus Scriptual Authority: Naqshbandi Response to Deniers of Mediational Sufism in British India,” in F. de Jong and B. Radtke (eds.) *Islamic Mysticism Contested : Thirteen Centuries of Controversies and Polemics*, Leiden: Brill, 1999.

本論文は 19 世紀初頭以降のインドにおけるスーフィズムをめぐる議論を対象としたものである。Buehler によれば、アフレ・ハディースが出現した 19 世紀以降のインド・イスラームの特徴は二極化にある。二つの極とは、①師を神との仲介者とする伝統的スーフィズム（インド的イスラーム）に代表される charismatic な極と、②ハディースやクルアーンの文言を使って直接、神の真意に到達することを是とし、神と人間のあいだに仲介者を認めない scriptural な極である。後者がアフレ・ハディースにあたる。この二極化を前提に論文の前半部で三つのムスリム革新派 ( バレールヴィー、アフレ・ハディース、デーオバンディー ) によるスーフィズムに対する見解が紹介され、後半部では、墓参詣と仲介、霊的位階、宗教権威のあり方についての、スーフィーとスーフィー批判者の主張の相違が詳述されている。

二つの極と三つの革新派の関係はこの論文の骨子であるにもかかわらず、わかりづらいので説明を加えておく。バレールヴィーの革新はクルアーンとハディースを多用してスーフィー的な要素と見なされている廟参詣などを説明することにある。いわばインド的イスラームの革新的な補強である。さしあたり①の極に属すが、（ハディースやクルアーンの文言を使用するという意味で）②の要素を含み持つところに革新性がある。アフレ・ハディースは②を代表することはすでに述べたとおりであり、彼らは神と人間を仲介するいかなるカリスマも認めない。1876 年にデオバンドにダール・アル＝ウルームを設立したデーオバンディーと呼ばれるウラマーたちはインド的イスラームを否定し、「正しい」イスラームを人々に教えようとする。しかし彼らはアフレ・ハディースと違い、教育者たるウラマー自身がスーフィズムにおける師に相当すると考える。バレールヴィーのカリスマが仲介型師匠であるとすれば、デーオバンディーのカリスマは教師型師匠である。この意味でデーオバンディーは（伝統的スーフィズムを否定する点で）②の極に属しながら、①の極に寄ったものと考えられる。

質疑応答では、「スーフィズムとサラフィズム」という合宿のテーマとの関連で、アフレ・ハディースによるスーフィズム批判に注目が集まった。アフレ・ハディースは、イスラームの最初の 3 世紀にスーフィズムが存在しなかったのを理由にスーフィズムを批判する。しかし、その批判対象は、スーフィズムに関わると「考えられている」民衆の慣行が大半である。そうした慣行批判をもって、分析する側が「（慣行批判をしているグループは）スーフィズム全体に批判的である」と捉えることはどこまで正当性があるか。その是非について今後も議論する必要があると思われる。

報告者：丸山大介（京都大学）

**KIAS ユニット３「急進派」研究会**
**（2007 年９月 21 日　於早稲田大学）**

京都大学イスラーム地域研究センター（KIAS）ユニット３（急進派）の第１回研究会が 2007 年９月 21 日に早稲田大学で行なわれた。本研究会では、まず、ユニット３の活動として、メンバーが自由に利用でき、急進派国際組織に関するデータを共有できるような備忘録的なウェブページを Wiki で製作するという提案がなされ、それについて議論した。この Wiki ページは非公式版として、メンバー制限を行うことで書き込み等を管理するものとし、いずれ KIAS の公式ウェブページと連動させ、非公式版のなかのデータを徐々に移行していく方針となった。

次に国際ワークショップ等、今後のユニット３の活動予定に関して話し合った。

報告者：保坂修司（近畿大学）

**SIAS グループ３・KIAS ユニット４共催　国際ワークショップ**
**（2007 年 10 月 12 日～ 10 月 13 日　於京都大学）**
**タイトル：Rethinking Tariqa: What Makes Something Tariqa?**

**Opening Session**　Chair:Akahori Masayuki (Sophia University, Tokyo: Leader of Group 3, SIAS)
“Welcome Speech”
Sato Tsugitaka (Waseda University, Tokyo: General Director of IAS & Director of WIAS)
“Opening Speech”
Tonaga Yasushi (Kyoto University, Kyoto: Leader of Unit 4, KIAS)

**1st Session**　Chair:Akahori Masayuki
発表題目：“When a Sufi Shaykh Thinks Out his Own Tariqa: Two Treatises by Ahmad Kâsânî Dahbidî (1461-1542) on the Khwâjagân *adab*”
発表者：Alexandre Papas (CNRS, Paris)
発表題目：“ ‘Tariqas’ without Silsilas: The Case of Zanzibar”
発表者：Fujii Chiaki (Kyoto University, Kyoto)
発表題目：“Institutionalized Sufism and Non-Institutionalized Sufism: A Reconsideration of the Groups of Sufi Saints of the Non-Tariqa Type as Viewed through the Historical Documents of Medieval Maghreb”
発表者：Kisaichi Masatoshi (Sophia University, Tokyo: Director of SIAS)

**2nd Session**　Chair:Tonaga Yasushi
発表題目：“To Whom You Belong?: Pir-Murid Relationship and *Silsilah* in Medieval India”
発表者：Ninomiya Ayako (Kyoto University, Kyoto)
発表題目：“Anthropology of Tariqa Rituals: The Initiatic Belt (*shadd, kamar*) in the Reception Ceremony”
発表者：Thierry Zarcone (CNRS, Paris)

**Closing Session**　Chair:Tonaga Yasushi

**General Discussion**

**Concluding Remarks**

Hamada Masami (Kyoto University, Kyoto: Advisory Member of KIAS)

**Opening Session:**

Opening Session は、「イスラーム地域研究」研究代表者・佐藤次高氏（早稲田大学）の挨拶に始まり、次にオーガナイザーの一人である東長靖氏（京都大学）から本ワークショップが開催されるまでの歩みと本ワークショップの趣旨が述べられた。歩みを簡単に説明すると以下のようになる。当ワークショップを主催する SIAS 研究グループ 3「スーフィズムと民衆イスラーム」及び KIAS 研究ユニット 4「広域タリーカ」（京都大学）は、1997 年に発足した創成的基礎研究「イスラーム地域研究」プロジェクト（～ 2002 年）の一環として 5 年間続いた「聖者信仰・スーフィズム・タリーカをめぐる研究会」を継承している。そしてその研究会は名の通り聖者信仰・スーフィズム・タリーカを学際的かつ多様な地域にわたって研究してきたが、現在は預言者一族への崇拝の問題も加えて研究を進めている。

他方、「タリーカ再考」と題された本ワークショップの問題意識が概略次のように述べられた。「タリーカ」という語からわれわれはかっちりとした組織を思い浮かべるが、それはイスラーム世界のどこでも、また長いタリーカの歴史のなかでいつでもあてはまるものなのか、その認識とは逆に、集団・組織というよりもむしろ修行の流儀と把握する方がよいのか。この問いに答えるために、さしあたりタリーカの概念を把握するのに不可欠な要素を抽出し、それをもとにさまざまな場所、さまざまな時代に存在したタリーカを比較することが本ワークショップの基本的な方針である。

**1st Session:**

Alexandre Papas (CNRS, Paris)

“When a Sufi Shaykh Thinks Out his Own Tariqa: Two Treatises by Ahmad Kâsânî Dahbidî (1461-1542) on the Khwâjagân *adab*”

「タリーカ」は組織なのか、スーフィーが精神的にたどる道か、という二者択一の問いはナンセンスだと PAPAS 氏は主張する。研究者は分析的に解釈しがちだが、むしろその 2 つの要素は連続しているのではないかと考えられる。さらに、組織と精神的にたどる道という 2 つの要素が分かちがたく結びついていることが、「タリーカ」一般に不可欠な要素なのではないかと提起した。本発表は、そのテストケースとして写本のかたちで遺されている、中央アジアのホージャガーン・タリーカのシャイフ・アフマド・カーサーニー (d. 1542) による一組の論考、『修行者のふるまい方』(Risala-yi adab al-salikin) と『誠実な者のふるまい方』(Risala-yi adab al-siddiqin) を綿密に読み解くことで、彼がタリーカをどのように考えているかを探ろうとした。なおこれら二論考の題名にはともに adab　という語が使用されているが、adab　は道徳、ふるまい方を意味し、スーフィズムでは確立された主題である。

『修行者のふるまい方』が語るタリーカは、精神的な修行道と、師を中心に形成される精神的な共同体の二面性を帯びている。カーサーニーが重視するのは、suhbat と呼ばれる精神的な対話および精神的な集いである。この suhbat には修行者がある程度の段階に達しないと参加できない。修行の道筋のなかではかなり遠い目標である。なぜなら外界のものにまったく惑わされなくなっては

じめて師と精神的な対話ができるからである。またカーサーニーが suhbat を重視した理由として発表者はホージャガーン・タリーカの構成人数が増えたため、師匠と弟子の一対一の対話 (rabita) ではなく、一対多の対話である suhbat に対話形態が移行したためと推測している。その正否はどうであれ、このようにして suhbat は個人的修行道とスーフィー教団としての集団性が交差する位置にあらわれることになる。なお発表者の評定では、suhbat にみえる集団は教団と呼べるほどの組織ではなく本質的には師やその後継者の周りに集まった弟子たちの共同体である。

『誠実な者のふるまい方』は『修行者のふるまい方』で語られた段階に続くより高い段階にいる者を対象にしている。この意味で、修行者と誠実な者の間にはランクの違いがみられる。そしてここで対象になっている誠実な者とはすでに悟ったスーフィー（師になる準備ができたスーフィー）である可能性が高い。『誠実な者のふるまい方』では『修行者のふるまい方』と違って suhbat に関する言及が見られないのは、すでに suhbat に参加する必要がないからだと考えられる。つまり、『誠実な者のふるまい方』ではすでに師匠に匹敵する段階に達した者が suhbat を行う際にいかにふるまうか (adab) が語られているのである。『修行者のふるまい方』が修行の過程を逐一説明していたのに対して、『誠実な者のふるまい方』では講話スタイルで書かれている点もそのような解釈の補強となるであろう。

では二論考の著者は結局タリーカをどのように考えていたのだろうか。精神的な完成に至る道、師匠になる段階の制度化、そして組織と師匠との関係は少なくとも二論考でははっきりと区別されていない。むしろそれらは二論考を通じて渾然一体となっているのである。

なお質疑応答では、二つの文献の性格の相違や両者の成立の背景などが論点となった。

Fujii Chiaki (Kyoto University, Kyoto)

“ ‘Tariqas’ without Silsilas: The Case of Zanzibar”

藤井氏の発表は、先行研究を踏まえつつ、自身のフィールド調査の結果と併せて、ザンジバルのタリーカの歴史的な状況と現在のあり方を比較・検討し、ザンジバルにおいてタリーカをタリーカたらしめている要素が何かを明らかにすることを試みるものであった。今回の発表は、2005 年 4 月 16 日から 5 月 16 日及び 2006 年 9 月 18 日から 12 月 18 日の 2 回に分けて行われた、カーディリーヤ、シャーズィリーヤ、マウリディ・ヤ・ホム、キラーマ、キグミ、キジティ、ホチ、ハムズィーヤという 8 つのタリーカの調査がもとになっている。本論では、各タリーカの起源を縦糸に、タリーカの要素と想定されるスィルスィラ（道統譜）、名祖、修行法であるズィクルの有無を横糸にして分析が行われた。

上記 8 つのタリーカのうち先行研究ですでに報告されているのは、カーディリーヤ、シャーズィリーヤ、マウリディ・ヤ・ホム（リファーイーヤ）、カーディリーヤから分派したキラーマの 4 つである。このうちマウリディ・ヤ・ホムとも呼ばれていたリファーイーヤは発表者が調査した時期には、すでにリファーイーヤという名が忘れ去られており、マウリディ・ヤ・ホムという名しか残っていなかった。また先行研究ではカーディリーヤから分派したとされていたキラーマが、発表者自身の調査ではシャーズィリーヤから分派したことになっていた。したがって先行研究の調査から発表者の調査までの間に少なくとも 2 つのタリーカの名が変化しており、そのうちのひとつのタリーカでは起源となるべきリファーイーヤという名すら忘れ去られていたのである（リファーイーヤはアデンからアフリカ東海岸に伝わったタリーカで、ここでマウリディ・ヤ・ホムと言われているも

のは子タリーカにあたる)。マウリディ・ヤ・ホムとキラーマという名はタリーカの創始者（名祖）の名にちなんだものではなく、修行法であるズィクルの名であること、逆にカーディリーヤ、シャーズィリーヤ、リファーイーヤが創始者の名にちなんでいることを考えあわせば、ザンジバルのタリーカの名称は、全体として名祖にちなんだ名からズィクルにちなんだ名へと変化していることが予想される。なおキグミ、キジティ、ホチ、ハムズィーヤもズィクルの名が冠せられたタリーカである。

他方、スィルスィラに目を向けると、先行研究と照らし合わせて、預言者ムハンマドにさかのぼるスィルスィラが保持されていたのはカーディリーヤとシャーズィリーヤだけである。マウリディ・ヤ・ホムは発表者の聞き取りによると 1964 年のザンジバル革命後スィルスィラは失われてしまったという。またキグミ、キジティ、ホチ、ハムズィーヤのスィルスィラは預言者にまでさかのぼっていない。スィルスィラが不完全であるか、あるいは失われているケースが多いなかで、ズィクルに関しては８つのタリーカで行っていないところはなかった。以上の考察から導き出せる結論は、名祖、スィルスィラ、ズィクルという３つの候補のうちで、ザンジバルのタリーカの必要条件はズィクルだけということになる。

われわれがまずタリーカのアイデンティティーと考えるのは名祖やスィルスィラである。ザンジバルのタリーカではこれらが副次的な要素でしかないばかりでなく、失われ、忘れ去られていくケースがあることはわれわれの常識をくつがえすものであった。なぜそのような事態が起こるのかという問いに対して、発表者は 1964 年のザンジバル革命から８年間続いた混乱期にそれらの要素が失われた可能性が高いと控え目に推測するにとどめた。本当にそうした外在的要因だけによるのかどうかの検証はこれからの研究課題であろう。

質疑応答では、ザンジバルのタリーカの実態をめぐる歴史的・社会的側面の問題、現地社会においてマウリド、ズィクルなどが持つ意味、1964 年革命がタリーカにもたらした影響、スィルスィラの有無とザンジバルの政治的状況の関係などが議論された。その際に発表者が繰り返し強調したのは、ザンジバルのタリーカにおけるズィクルの重要性であり、ズィクル・グループという従来のタリーカイメージとは異なるタリーカのあり方であった。スィルスィラをもたず、名祖ももたないタリーカは、ザンジバル、ひいてはアフリカだけにみられる現象であろうか。われわれがタリーカだと思っているものをタリーカ研究の俎上に載せているだけで、本当はいろいろなところにズィクル・グループに類するものがあるのではないか。そのような思いを強く持った。

Kisaichi Masatoshi (Sophia University, Tokyo: Director of SIAS)
“Institutionalized Sufism and Non-Institutionalized Sufism: A Reconsideration of the Groups of Sufi Saints of the Non-Tariqa Type as Viewed through the Historical Documents of Medieval Maghreb”

私市氏は、発表の冒頭で、われわれは前近代におけるタリーカというものを過大評価してきたのではないか、つまりタリーカという言葉でイラク南部に始まった組織化・制度化され、さらには国際化に向かうスーフィー集団を指し、それをどの地域のスーフィー集団にもあてはまるモデルとしていないか、という疑問を提示した。発表者はまず、12 － 13 世紀にイスラーム世界に起こった最も革新的な動きは、スーフィズムの制度化 (institutionalization) であり、それはイラク南部で始まった、カーディリーヤ、リファーイーヤ、スフラワルディーヤという３つの「国際的なスーフィー教団」の形成であったと指摘した。対して、この時代にモロッコやマグリブでは、ターイファ・サンハージーヤ、ターイファ・マージリーヤのようにターイファと呼ばれる現地に根付いた（国際

的ではない）組織が形成されていた。こうしたマグリブの事例をみれば、ハーンカーからタリーカを経由してターイファ段階に至るというトリミンガムによる発展三段階説が普遍的に妥当するのかどうかが疑われなければならない。発表者はマグレブの有名なスーフィー、アブー・マドヤン (d.594/1198) とその弟子たちの動向を追うことでマグレブにおけるタリーカやターイファの所在を検証した。

アルジェリア東部のビジャーヤに居を構えていたアブー・マドヤンのまわりには多くの人が集まり、彼の行っていたサマーの集いやズィクルの集会は「いわゆるタリーカ」が行っていたものとほとんど変わらない。しかし彼はタリーカやターイファを形成したわけではない。またアブー・マドヤンの弟子たちが活躍した 12 世紀から 13 世紀にリファーイー教団のメンバーがモロッコにいたが、彼もまたタリーカやターイファを作ったわけでもない。

イブン・クンフズ（d. 810/1407-8）が報告するところによると 14 世紀西モロッコに 6 つのターイファがあったという。そのうちのひとつ、ドゥッカラにあるターイファの状況がイブン・クンフズによって詳しく述べられている。その記述によると、ターイファの集会には病人を含む大勢の人が集まり、ズィクルを行ったり、治療を行ったりしていた。この様子は「いわゆるタリーカ」の姿に似ているが、西モロッコのターイファは国際的ではなく、地方に限定されたものであった。

次の例はアブー・マドヤンの弟子にあたるアブー・ムハンマド・サーリフ・アル＝マージリーが創設したターイファ・マージリーヤである。アブー・ムハンマド・サーリフはアブー・マドヤンの教えに忠実にしたがいながらも、ターイファ独自のユニフォームを導入した。これも「いわゆるタリーカ」の習慣と似ているが、このターイファも拡大せずに地方にとどまっていた。

最後の例はタミーミー (d. 603-4/1208-9) の手による聖者伝からの情報である。この聖者伝には 115 人のスーフィー・聖者が記載されているが、ターイファや（組織としての）タリーカという語は登場しない。タリーカという語がつかわれるときにはスーフィズムの方法という意味においてである。しかしそこで描かれる集会の模様は「いわゆるタリーカ」と同じである。

以上のマグレブの事例により、われわれが考えるタリーカという概念はマグレブのスーフィー集団には当てはまらないことが示された。それに伴い、イラク南部で発生した、「いわゆるタリーカ」をモデルにしたトリミンガムの発展段階説は少なくともマグレブのスーフィー集団には当てはまらないことも明らかになった。

質疑応答では、発表者が用いた organization や institutionalization といった語はどのような意味で使われているのか、タリーカ・タイプ（「いわゆるタリーカ」のこと）と非タリーカ・タイプのスーフィーはどのように異なるのかといった点が議論になった。ではいわゆるタリーカの意味でタリーカという語が（少なくとも普遍的に）使用できないのであれば、どの意味で使うのが適当なのであろうか。発表者は、その問いに対して、前近代のタリーカは、修行の手段、方法、神と一体になるための道という意味とともに association という意味で使った方が organization よりも実態に即していると回答した。本発表はタリーカの意味合いに直接切り込む大胆な発表であり、フロアーからの反響は大きかった。

報告者：茂木明石（上智大学）

**2nd Session:**

Ninomiya Ayako（Kyoto University）

“To Whom You Belong?: Pir-Murid Relationship and *Silsila* in Medieval India.”

発表者は、中世インドにおけるチシュティー教団関係者の手による『聖者伝』などの史資料の分析から、スィルスィラおよびその基礎となるピール - ムリード関係の特質を明らかにすることによって、本国際ワークショップの共通テーマ（Rethinking Tariqa: What Makes Something Tariqa ?）に取り組んだ。全５章からなる本発表の具体的構成は以下の通りである。

１. ‘Order’ and *silsila*
２. Development of *silsila* names in Medieval India
３. Understanding of *silsila* structure seen in Siyar al-awliya
４. Gaps between ‘Order’ and *silsila*
５. Meaning and importance of *silsila* for Medieval Indian people

第 1 章は問題提起に当てられ、先行研究の特徴として、スィルスィラが「教団（order）」の同義語としてしばしば用いられてきたこと、中世インドにおける「教団」形成の重要な要因のひとつとしてスィルスィラが捉えられてきたことが挙げられるという指摘がなされた。これを踏まえて、本発表はスィルスィラとピール - ムリード関係の重要性、およびスィルスィラの構造をめぐるスーフィーおよび教団員の理解をめぐって展開するものである。

第 2 章では、ピールとムリードの直接的かつ個人的な関係を基盤とし、スィルスィラという師弟関係の累積によって表現される当事者たちの関係が、14 世紀半ば以降、集合的な表現へと根本的な変容を遂げていることが、ムルターン・スフラワルディーヤの手になる文書史料の事例などを通じて明らかにされた。

第 3 章では、ニザームッディーン・アウリヤーの弟子ミール・ホルドによる聖者伝『スィヤール・アウリヤー』の章構成が分析に付され、預言者ムハンマドを頂点とし下降線を辿る「樹形図」としてスィルスィラを認識する「研究者的視点」に対して、自己を起点とし、師匠を媒介して預言者へと向かう遡及的な流れとしてこれを認識する「教団員的視点」の重要性を強調した。

第 4 章では、スィルスィラを「教団」の同義語として把握することの問題点が指摘された。その根拠は、第一に、スィルスィラが教団に加入した成員によって共有されている側面がある一方で、ムリードや教団に近しい人々はしばしばこのスィルスィラには含まれないことがある点、第二にスィルスィラやその同義語として捉えられてきた *khwandan* / *khwanwadah* なる用語が中世インドにおいて多様な意味合いを有しており、特定個人が保持するスィルスィラの範囲をめぐっても一定の見解が存在しないことなどが挙げられた。

最後に、第 5 章では、教団に加入する一般の人々の視点から見た場合のピールとの関係の有する意味と重要性に議論が向けられる。発表者は、ニザームッディーン・アウリヤーが語った預言者たちをめぐる逸話などを手掛かりとして、「スーフィー・ピール」に期待されているのは、弟子たちの罪を自らの罪として引き受け、最後の審判の日にとりなしを行うことであるという点を重視する。この点から、従来の聖者信仰研究においてしばしば重視されてきた現世利益に対して、現世のみならず来世における安寧、罪の許しもまた聖者との関係を有する一般民衆にとって重要であるこ

とを強調する。

以上のように、中世インドを対象とした二宮氏の発表は、先行研究が抱えている問題点を克服しようとする意識に強く裏打ちされた、多岐に渡る内容を含みこんだものとなっている。

**コメント：**

コメンテーター：Takahashi Kei（Sophia University)

エジプトにおけるタリーカについての研究を進めている高橋氏は、オスマン朝下エジプトにおけるタリーカの事例を参照しつつ、二宮氏の発表について大きく２つの疑問を提示した。第一点目は、タリーカを order と同義に捉えることが可能か、第二点目は、ピール - ムリード関係の重要性を強調する二宮氏に対して、組織論的観点から見るならばピールとムリードのみならず、直接的にはタリーカに帰属してはいなくともタリーカに近しい一般民の存在が重要なのではないかという点をめぐるものである。また高橋氏は、第二点目の問いに関連して、オスマン朝下のエジプトにおける知識人スーフィーの手になる文書の中に、スーフィー的教義への理解が不十分なままズィクルにふける一般民のタリーカ参加を批判した記述が見出されることに言及して、知識人の活動に焦点が当てられがちな史資料も扱いによっては一般民の活動実態、一般民と知識人の相互関係、一般民とタリーカの関係などの諸相を解明する上での、有益な情報源となる可能性を指摘した。

**討論：**

スィルスィラとピール - ムリード関係を比較・対照させた二宮氏に対し、討論では、概念規定をめぐる問題点、両概念の関係をめぐる疑問、高橋氏のコメントを受け一般民をも視野におさめた視点によるスィルスィラおよびピール - ムリード関係の再検討、などといった諸点をはじめ、数多くの質問が出され、活発な議論が行われた。

たとえば、スィルスィラをタリーカの重要な構成要素として二宮氏が捉えているのに対して、果たしてスィルスィラはタリーカにとって必要不可欠であるのかという疑問が提示された。

このほか、スィルスィラを「リネージ」として把握した発表者に対して疑問が提示されてもいる。その根拠は、スィルスィラは世代間の連鎖によって構成されるものであるのに対して、リネージの概念的特徴は、必ずしも世代間の連続的な関係の集積によって成り立っている必要はなく、祖先と子孫の直接的な関係によっても成立可能である、という点にある。

さらに、スィルスィラとピール・ムリード関係を巡っては、周辺的な立場にある弟子の視点に立つならば、ピールとの関係があれば、それが教団への帰属、アイデンティティーの問題を解決する指標となり得るのであって、ピールの精神的祖を世代ごとに辿るスィルスィラは必ずしも必要ないのではないかという見解、翻ってスィルスィラは預言者とピールの関係づけやその正当化、タリーカの集合的アイデンティティー構築などにとって不可欠な要素と言えるのではないか、などの意見をはじめとした多様なコメント／質問が提示された。

ワークショップ共通テーマとの関連では、何がタリーカを構成するのかという点を検討するにあたって、現代のタリーカに残っている要素を検討することによって、タリーカを構成するもっとも重要な要素が明らかになる可能性があるのではないかという指摘もなされている。

スィルスィラ、ピール - ムリード関係を主題とした二宮氏の発表は、このように様々な質疑応答を得ただけでなく、総合討論においても引き続き、活発な議論を生み出す土台となった。

Thierry Zarcone (CNRS, Paris)

Anthropology of Tariqa Rituals: The Initiatic Belt (*shadd, kamar*) in the Reception Ceremony

ザルコン氏によれば、スーフィズムにおける儀礼をめぐる研究は、アフド (Ahd)、タルキーン・ズィクル (talqin dhikr)、ヒルカ (hirka) という３つの儀礼への着目、およびアラブ圏でのスーフィズムへの関心の集中という特徴が一般に見られる。これに対し、トルコ語／ペルシャ語圏におけるスーフィーの儀礼はこれまで度外視されてきたものの、同言語圏における儀礼は剃髪およびベルトの着用とも結びついて複雑な歴史的展開を遂げてきた。

以上のような理解の下、ザルコン氏は、トルコ／ペルシャ語圏におけるハクサリー教団 (Khaksariyya)、ベクタシー教団（Bektasiye）、メヴレヴィー教団 (Mevleviye)、およびオスマン朝における職人ギルドの事例をもとに、シャッド（ベルトの着用）が果たす役割の検討を行った。また発表の後半では、これらトルコ語／ペルシャ語系のタリーカの特殊性やギルド、フトゥーワのタリーカへの影響に対する理解を深める一助として、カーディリー教団、リファーイー教団など「アラブ系」のタリーカの事例も提示された。発表は、文書史料に記された「帯」の作成／着用方法や、豊富かつ貴重な多数の写真提示も含めた詳細なものであり、大変興味深いものであった。

発表は以下の４章から構成されている。

１. The initiatic belt in the Futuvva and in the guilds of craftsmen
２. The belt of the Sufis
３. Anatolian syncretism: the initiatic belt in the Rifa'iye and in the Kadiriye
４. Conclusion

第１章では、フトゥーワと職人ギルドにおけるシャッドが取り扱われ、その使用の歴史的変遷の概要が明らかにされた。

ザルコン氏によれば、シャッドの普及は、直接的には 10 世紀から 11 世紀におけるフトゥーワ運動に由来するが、その起源は、ゾロアスター教における神聖なベルトの着用、あるいはムスリム達が 10 世紀以前に実践していたズボンやストラップなどの儀礼的着用にまで遡りうるという。

シャッドをめぐる慣行は、その後 14 世紀から 15 世紀にかけてアナトリア地方で広がったアヒー運動を通してトルコ系スーフィーの家系にも広がり、17 世紀中葉にはシャッドの儀礼内容に関する最古の記述がなされ、19 世紀にはシャッドに関するさらに多くの記述がなされるに至っている。

以上のようにフトゥーワ運動において儀礼として広く用いられるようになったシャッドは、トルコ語／ペルシャ語圏において、職人ギルドのみならずタリーカとも結びついているほか、イスラーム化したシャーマニズムとも結びつくなど、多様な展開を見せている。

第２章では、スーフィズムにおけるシャッドが取り上げられた。ザルコン氏は、中央アジアにおけるカランダリー教団の教本を元に、シャッドが具体的にどのようにして実践されていたのかを、ベルトの作成方法、その巻き方、ベルトに付け加えられる結び目の数に見出される宗教的意味や関連する逸話などを交えつつ明らかにした。

第３章では、リファーイー教団、カーディリー教団などの「アラブ系」教団におけるシャッド儀礼の歴史的起源やその特質の解明を目的として、カーディリー教団については皮なめし職人ギルドとの関連、リファーイー教団についてはフトゥーワ運動との関連を史資料の分析から検討し、スー

フィー教団とは直接関係のない職人ギルドやフトゥーワからシャッド儀礼が導入された可能性があることが明らかにされた。

結論では、第一に、ハクサーリー教団（Khaksariyya）、ベクタシー教団（Bektasiye）、メヴレヴィー教団（Mevleviye）などトルコ語／ペルシャ語系の教団がフトゥーワ運動などの影響下にシャッドをはじめとする儀礼の導入を図ったことが一般的に広く知られていることを踏まえたうえで、第4章における議論の独自性が再び確認･強調された。第二に、発表の総括として、ザルコーン氏は「何があるものをタリーカにするのか」を理解する上で儀礼分析は有効であるが、少なくとも二つの点で注意が必要であることが指摘された。それは、（1）シャッドをはじめとするスーフィーの儀礼が、スーフィー的な人々のみならず、非スーフィー的な人々によって実践されていること、およびスーフィズムの出現以前からシャーマニズムなどにおいて同種の儀礼が実践されてきたことに視野を拡大して儀礼研究を展開する必要があること、（2）タリーカへの入会儀礼にはシャッドのみならず多様な儀礼があるという点にも注意を払う必要があること、である。

**コメント：**

コメンテーター：Morimoto Kazuo (Tokyo University)

10 世紀から 20 世紀にわたるアナトリア／トルコ、中央アジアなど広範な地域・時代を対象とした本発表について、森本氏は、とくに、霊的・神秘的な運動、フトゥーワ運動、アヒー運動などとの関係においてタリーカの境界を検討することが重要な研究課題であることが明らかにされたこと、これらの集団が神秘的な趣好を共有するという連続性を有しつつも、同時に異なる集団として差異化されていることを詳細な事例から明示した点を独創的な貢献として高く評価した。

質問は、ギルドが果たした重要な役割についてどのように考えるかという点、タリーカが形成された後もギルドはシャッドの普及に重要な意義を担ったが、こうした場合にどのような基準がギルドとタリーカを区別しうるものとして設定され得るのか、という２点についてなされた。

**討論：**

森本氏によるコメント／質問を受け、まずザルコン氏から、ギルドの商業的活動に留まらず極めてスーフィーに近い活動を行っていた事例があることが最新の研究から明らかにされつつあるものの、テッケなどに関する古文書資料そのものが少ないため、今後更なる古文書の調査・研究および現地調査が必要とされるという回答がなされた。これとあわせて同氏は、「何があるものをタリーカにするのか」という本ワークショップの主題について考察を深めてゆく上で最も重要な点として、ズィクルなどに偏重してきた研究姿勢を修正し、シャッドをはじめとする多様な儀礼に関する研究を進展させること、同時に儀礼の存在のみがタリーカを成立させる不可欠な要素とは限らない点に注意を払う必要性、儀礼がタリーカ間で伝達される際に生じる変化に対する理解を深めること、などを指摘した。

さらに討論では、加入儀礼に注目しつつタリーカとギルドの強い関連性を明らかにしたザルコン氏の発表に対して、かりに加入時ではなく、修行が進んだ段階における儀礼の比較検討を実施したのならば、タリーカとフトゥーワの関連性を巡って今回とは異なる側面が明らかになる可能性もあるのではないかというコメントも提示された。

**Closing Session:**

Tonaga Yasushi (Kyoto University)

まず、本ワークショップの問題意識を明確に示した東長氏によるオープニング・セクションでの研究方針に基づいて全発表者の発表をまとめることによって、第一、第二セッションの議論を明確化し、総合討論における議論が生産的なものとなるよう道筋がつけられた。具体的には、東長氏は、（1）タリーカなる概念を取り扱って行く上での問題群、および（2）タリーカを構成する要素という二側面から各発表の特質をリストアップすることによって、それらの共通点／相違点を明らかにした。とくに前者（1）については、タリーカを実体概念／分析概念のいずれとして各発表者が理解しているのか、スーフィズムとの関連の有無、組織としてタリーカを把握可能かどうかなどといった諸点から各研究者の議論の内容が確認された。これに対し後者（2）については、暫定的に「リネージ」、儀礼／実践という用語のもとで個々の発表の事項内容が一覧として提示された。

さらに、東長氏によるまとめの妥当性について各発表者に確認が取られる過程で、スィルスィラをタリーカの重要な構成要素と見なしうるのかどうかという点をめぐる是非、タリーカを構成する要素をリネージおよび儀礼／実践という二側面のみでは把握しきれないであろうこと、新たな要素を盛り込み必要性があること、儀礼／実践を区別すべきであろうこと、などといった諸点について議論が深められた。最後に、今回の発表では教義が取り上げられることはなかったものの、成員の結合に対して教義も重要な役割を果たしうるものとして看過できないのではないかというコメントが東長氏より付せられた。

**General Discussion:**

総合討論は、（1）藤井氏の発表におけるタリーカ理解、（2）教団名をめぐる理解、（3）スィルスィラを重視する研究姿勢の妥当性、（4）一般民の視点から見た場合の教団理解など、大きく四つの主題を巡って展開された。

第一に、ザンジバルにおけるスーフィー教団を（a）タリーカ一般と（b）儀礼集団として特殊化したズィクリ・グループの二類型に分類した藤井氏の発表に対する質問は、ズィクリ・グループは、彼ら自身の認識からするならばタリーカとして見なされているのではないか、という質問がなされた。さらに、この質問と対応して、ズィクリ・グループに関する藤井氏による説明の中に、タリーカにおける修行実践の中核をなすファナーなどの概念について明確な言及がなされていなかったことを受けて、指導的立場にある者が、ファナーや精霊による憑依について一体どのような見解を有しているのかという点について質問が出され、藤井氏が提起した分類枠組みの妥当性に対して、発表で展開された組織論的側面のみならず、構成員の認識、タリーカとしての活動実践を支える理論的側面からの検討が必要であることが示唆された。

第二に、初日の議論を受けて、マラーマティーヤなど教団創始者の名を冠していない教団名が複数存在することを考慮に入れるならば、創始者名継承はタリーカ形成において真に重要な要素と見なしうるかという疑問が提出された。これに触発され、創始者名の理念的な重要性とタリーカ名が必ずしも創始者名を冠していないという実態の齟齬が再確認された上で、マラーマティーヤの事例などからシャイフの権威の欠如がタリーカ名にも影響を及ぼしている可能性への言及、教団名が教団が奨励している活動を反映したものがあるという指摘に始まって活発な議論が展開された。

第三に、スィルスィラについてであるが、本ワークショップにおけるスィルスィラをめぐる議論

は、スィルスィラをタリーカ研究の中核に据えることが出来ないということを示唆しているかもしれないという意見が提出された。これに対し、アイデンティティーの核としてスィルスィラが活用されている側面を軽視してはならないという意見、研究者を初めとする部外者に対して、対外的には自らの正当性を主張するためにスィルスィラが必要とされる一方で、教団関係者間ではスィルスィラはさほど必要とされないのではないかという意見、彼ら自身の言葉や認識を手掛かりとした上で、スィルスィラの重要性に関する理解を深めた方が良いという意見などが提出された。

第四に、二宮氏の発表と質疑応答で明らかになった「下から」の、一般民の視点に基づくタリーカ像の再検討や、ワークショップ初日の藤井氏および私市氏による発表において顕著となった分類の妥当性について今後さらに議論を深化させてゆく必要性が確認された。

**Concluding Remarks:**

Hamada Masami (Kyoto University)

浜田氏は、本ワークショップの総括として、まずスーフィー、タリーカの政治的側面に関心を寄せ続けてきた自身の研究関心について振り返り、こうした姿勢を修正する必要性があると考えていることに触れた。氏の発言は、スーフィーの視点に立って、彼らの主張を理解することの重要性を再認識したものであり、本ワークショップにおける主題について今後考察を深めてゆく上でも、組織論的側面に関心が集まった今回とはまた異なる観点から成果を挙げてゆく上での指針となる提言であった。

また本ワークショップにおいて東長氏より提唱された実体的概念および分析的概念を区別すべきという姿勢については、今後とも両者を厳密に区別していく必要性が強調されたほか、仏教を初めとする他宗教における「教団」の活動との比較研究を展開していくことも提唱された。

**所見：**

本研究会は、「イスラーム地域研究」において発足したスーフィズム・聖者信仰・タリーカをめぐる研究会が継続・発展したものである。

すでに 11 年の研究蓄積を誇り、かつ国内のみならず積極的に海外における国際的な学術会議の場でもパネル・ディスカッションを組むなど、国内外の研究者との学際的な交流を継続してきた本研究会が、本年、日本国内において国際的なワークショップを組んだことの意義はきわめて大きいと筆者は考える。

イスラーム地域研究ならびに NIHU プログラムの下で継続されている本研究会の良さのひとつは、国際的にみても最先端の研究成果を発信し続けているだけでなく、海外研究者との持続的な関係構築を目的として実施されている招聘、次世代の研究者の育成を目的とした若手研究者の積極的活用にもとづく発表、討論の場の設置、などといった点に対して一貫して注意深い配慮がなされていることである。

また、中東のみならず、中央アジア、南アジア、東南アジア、西アフリカ、東アジアなど広範な地域へ目配りを通じてこれまで蓄積されてきた各地域で展開する教団の歴史・活動などに関する実証的報告を踏まえ、本ワークショップに特徴的に示されたように理論的関心に基づいた研究発表が提示されてもいる。

今回のワークショップは、そうした理論への関心と、タリーカをめぐる諸現象の包括的理解へと至るための視座の提供、各研究者が重要と認識する事項の確認を理論の深化の前提として行うとい

う点でも重要な意味がある。また、今回のワークショップでは、「何があるものをタリーカにするのか」という主題に対して組織論的観点からアプローチした研究と議論が多く提出されたように思われる。とくに集団形成の契機が一体何にあるのかという点について多くの関心が寄せられ、参加者の有する問題関心の方向性がある程度明確になったこと、また今回の議論で対象にならなかったものの今後研究において取り上げられるべき課題が明らかになったという点が重要な成果であったと考えられる。

これ以外の点では、本ワークショップは、発表者の事前の準備、共通テーマへの貢献に対する意識の共有、コメンテーターによる発表草稿の事前読み込みとコメントの準備などをはじめとして、詳細な点に至るまで注意深く準備が進められていた。その結果、議論としても、またワークショップとしても大変充実した内容となったことも、ここに付記しておきたい。

最後になるが、本研究会は多数の参加者によって構成されたものであるので、次回の議論を深化させる上でも、また継続した議論を可能にする上でも、今回課題となった点をまとめあげた報告書作成が重要な意義を担ってくると思う。以上のような問題意識もあり、多少長めではあるが、なるべく詳しく本国際ワークショップ 2 日目の概要を報告するよう努めた。

報告者：斎藤　剛（日本学術振興会・特別研究員〔PD〕）

**大阪大学「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト・KIAS ユニット 2 共催　研究会（2007 年 10 月 26 日　於大阪大学）**

発表題目：「中道派形成におけるイジュティハード：1957-58 年 International Islamic Colloquium( ラーホール ) におけるマウドゥーディーの見解」
発表者：山根　聡 ( 大阪大学世界言語研究センター)

本研究会は、KIAS ユニット 2「中道派」の実質的な第一回研究会であり、当ユニットの研究課題であるイスラーム国際組織における中道派とは何か、中道派研究はいかなるかたちでありうるのかが主なテーマであった。まずユニット責任者である山根氏が中道派研究のテストケースとして 20 世紀における南アジアのイスラーム運動の先導的な担い手であったマウドゥーディーによるイジュティハード論を題材として示した。イスラームにおける中道派は先行研究では現代的な意味として急進派でもなく、世俗主義でもなく、しかもイスラーム復興を志向する積極的な改革派だと定義されている。もし中道派が国家と関係を持った場合、近代国家の枠組みのなかで、国家とイスラーム法の関係が問題となるため、イジュティハード論は不可欠な要素となる。発表者が、イジュティハードを（少なくとも国家とかかわる）中道派の形成の重要なポイントと考えるゆえんである。

このような問題意識を前提に 1957-58 年にパキスタンのラーホールで開催された国際イスラーム・コロキアムとその場で発表されたマウドゥーディーのイジュティハード論が考察の俎上にのぼった。マウドゥーディーが考えるイジュティハードとは立法の方法として神の主権、預言者、クルアーンやスンナの解釈・推論・引用がない場合に行使されるものである。ここで重要な点は、そうしたイジュティハードの行使は神が人間に決断する権利を与えたことに基づくと解釈されていることであり、それは神の主権を人間が行使するということである。このようなマウドゥーディーのイジュティハード論に対しては、同時代的に様々な反応があり、彼に対して疑問・反論が投げかけ

られた。これらの疑問への回答において、マウドゥーディーのイジュティハード論はより明確な姿をあらわしている。畢竟、マウドゥーディーによる正しいイジュティハードとは、ムジュタヒド（イジュティハードを行う者）が社会の現実問題に精通していること、またイジュティハードに基づく立法を監視する機関の存在があること、その他多数の条件が満たされたものである。もしそれらの条件が満たされない場合、イジュティハードではなくファトワーに過ぎない。しかし、はたして彼の考えるイジュティハードはしっかりと輪郭がさだまった実行可能なプログラムになっているのか、それとも単に理念にとどまるものなのか。この問いは、マウドゥーディーのものにかぎらずイジュティハード（ひいてはイスラーム法）が国家形成のプログラムたりえるのかというもっと大きな問題につながっていく。発表者からは、中道派が国家形成と結び付いていくのは南アジア特有の現象なのだろうかという問いも出された。

その後の質疑応答では、主に中道派を何と何の間の関係性のなかで捉えるのかという問題が議論された。中道とはたんに極端でないものを指すと考えれば、極端が何であるかによって中道派がどのようなものかは変わってくるからである。地域的歴史的にさまざまな中道派があったことが予想されるので、さまざまな用例を集めなければイスラームの中道派は語れないだろうということに議論は収束した。

報告者：黒田賢治（京都大学）

発表題目：「中道派のイスラーム復興運動―エジプト・ムスリム同胞団の思想と実践」
発表者：横田貴之（日本国際問題研究所）

本発表の要点は、エジプトのムスリム同胞団にとって「中道」の意味するものとは何か、を考えるに際して、同胞団が「中道」をどのように実践してきたのか、そしてイスラーム復興運動におけるムスリム同胞団の位置づけ・意義を検討することによって答えがえられるのではないかという点にあった。中道派とは（極端がどのようなものであれ）２つの極端の間に位置する派であるとの発表者の想定は、直前の山根氏の発表および質疑応答と軌を一にする。上記の３つの問題点は実際には連動しており、最終的に発表者が提示したムスリム同胞団の中道派的あり方とは以下のようなものであった。

エジプトのムスリム同胞団による「中道」の実践は 20 世紀の前半と後半で異なっており、20 世紀前半のムスリム同胞団の実践は、欧化主義派と伝統墨守派のいずれにも与せず、中道の道を歩むこと（対立する２つの主義である欧化主義と伝統墨守がイスラーム復興を志向していないことから、この時期にはムスリム同胞団はイスラーム復興の主な担い手となる）にあり、後者では急進的なイスラーム復興運動とイスラームを排除する世俗主義との間で改革を志向すること（この時期のイスラーム復興運動は急進派と穏健派に分かれており、同胞団は後者の担い手である）にあった。換言すれば、同胞団にとって「中道」の意味づけは終始一貫していたわけではなく、時代によって変化しているのである。同胞団の歴史からも中道派とは何か固定した立場を指すわけではなく、対立する２つの極があってはじめて成り立つ派であることは明らかであろう。最後に発表者から、最近、エジプトでワサト党（文字通り「中道党」）が結成されており、注目に値するとの報告があった。

本発表は、本研究会のテーマである「中道派」という概念を、関係性の中でとらえようとするものであった。質疑応答では「中道派」という概念をめぐって活発な討論が行われた。簡略化して言うならば、「イスラーム中道派」を時代・地域横断的な概念として用いるためにはどうすればよいか、

西洋的な分析視点／評価から脱却しつつ分析概念を精緻化するにはどうすればよいか、といった問題意識をもとにした議論であった。時代・地域横断的に中道を語る際には、異なる極をもったいくつかの軸が想定できるのではないかといった提案や、イスラームには歴史的に「中道をいく」という考え方が内在しているといった発言など、興味深い内容であった。

その他、同胞団における革命思想をめぐる問題、エジプトの同胞団とインドのイスラーム党との関係について、同胞団と共産党における組織形態の類似性などをめぐって活発な議論が行われた。

報告者：平松亜衣子（京都大学）

**KIAS ユニット 1「国際関係」 講演会**
**（2007 年 10 月 29 日　於京都大学）**

講演題目：Contemporary Yemen and Islam
講　師：Ahmad al-Kibsi (Vice-President for Academia Affairs and Professor of Political Science, Sana'a University)

KIAS ユニット 1（国際関係）では、サヌア大学副学部長であるアフマド・キブシー教授を招き「現代イエメンとイスラーム」と題する講演会を開催した。イエメンは古くから交易の中心地であり、歴史的にさまざまな文化の受け皿となってきた。19 世紀前半から東南アジア、インド、東アフリカへの移民が行われており、その子孫はハドラミーと呼ばれ、環インド洋ネットワークを形成している。また近現代史において国際関係の焦点になったことは記憶に新しい。イエメンはユニット 1 の重要なテーマのひとつであり、この講演会は外部からの視点ではなく、イエメン内部からの発言を聞く絶好の機会であった。

ギブシー教授の祖父が 1938 年に訪日し、東京のイスラームセンターの建設に携わり、イエメンと日本の関係の強化に尽力されたという話はわれわれにとって驚きであった。日本とイエメンの関係はキブシー教授の祖父から始まったのである。

本題では、イエメンの歴史、現代イエメン成立の過程、現在のイエメンの状況が主なトピックとなった。シバの女王の時代からイエメンは豊かな国であり、イスラーム的にも「信仰はイエメンからやってくる」といわれるように重要な土地であった。帝国主義時代にはイギリスに占領された南部のアデンを除いて外部勢力から完全に征服されることがなかったが、1962 年のイエメン革命を機に、エジプトとサウディアラビアの代理戦争の場となってしまった。そして、冷戦の崩壊とともに南北イエメンの統合が行われる。このあたりの情勢はイエメンやアラブ世界を取り巻く国際関係と関連付けて語られ、イエメン人による世界情勢の解釈の一端が垣間見られた。

現代イエメンは政党や選挙に基づいて運営されており、人権意識や民主主義が根付いてきたこと、また、サウディアラビアやオマーンといった近隣諸国との間に抱えていた外交問題も交渉を通じて平和的解決が図られていることがイエメンの現況として特に強調されていたのは興味深い。対外関係に関してはとりわけ 4 つのポイントが指摘された。第一に、GCC（湾岸協力会議）との関係（将来、GCC に加盟する可能性があるとのことである）、第二に「サヌア・グループ」と呼ばれるアフリカ諸国との関係、第三にパレスチナ問題を中心とするアラブ関係、第四に非同盟諸国や欧米との協調関係についてである。このような国内政治と国際関係のなかで、イエメンは安定的な国家運営

が行われるようになったと締めくくられた。

以上のように、地理的に湾岸諸国、それ以外のアラブ諸国、アフリカ東海岸、インドの焦点に位置するイエメンが、冷戦期の分裂状態から立ち直り、さまざま国と国際関係をとりもとうとしているさまが内部の視点から語られた。イスラーム世界の国際関係を研究するうえで貴重な証言を得ることができた講演会であった。

報告者：堀抜功二（京都大学）

**京都大学地域研究統合情報センター・KIAS ユニット 1「国際関係」共催「現代中東における国家運営のメカニズムに関する実証的研究と地域間比較研究会」**
**（2007 年 11 月 3 日　於京都大学）**

発表題目：「中東諸国におけるグローバリゼーションと政治体制の頑健性」
発表者：浜中新吾（山形大学地域教育文化学部）
発表題目：「現代イラクにおける国家体制とレジティマシー：バアス党権威主義期と戦後連立政権期」
発表者：山尾　大（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

2007 年 11 月 3 日、KIAS ユニット 1「国際関係」は、京都大学地域研究統合情報センターとの共催で「現代中東における国家運営のメカニズムに関する実証的研究と地域間比較研究会」を開催した。当日は、 浜中新吾氏（山形大学）および山尾大氏（京都大学）による発表が行われた。

はじめに、浜中氏の報告は「中東諸国におけるグローバリゼーションと政治体制の頑健性」と題し、グローバル化の波にさらされている中東のレンティア国家が政治体制を維持する仕組みについて明らかにした。分析枠組のたたき台とする Acemoglu - Robinson モデルによると、経済のグローバル化は政治体制の民主化を刺激するという。しかしながら、中東のいわゆるレンティア国家では、経済の開放度はそれほど高くないため、政治体制へはあまり影響しないと考えられる。すなわち、経済が石油輸出などに依存しているため、それがいくら増加しても、グローバル化による民主化効果には寄与しないという理屈である。発表者自身の計量分析によっても、レント収入に依存している中東諸国は、民主化移行の効果が抑制されているという結果が出された。

計量政治学による政治分析は、門外漢からするとなかなか理解しにくいものである。しかし、発表者が丁寧にその仕組みを説明したため、分析結果の手続きとその意義も理解しやすかった。本研究会が目的とする、ディシプリンと地域研究の統合にとって新たな視点が提供された。

続いて、山尾氏は「現代イラクにおける国家体制とレジティマシー：バアス党権威主義期と戦後連立政権期」と題して、戦後イラクの国家運営メカニズムが、宗派・民族的動員に収斂している要因がサッダーム政権下の政治・社会状況からの一貫した状況にある点に注目して検討した。これは、戦後イラク政治を考えるときこれまでのイラク研究における「モザイク国家論」および「ナショナル・インテグレーション論」では捉えきれないとの問題意識による。すなわち、政治体制や政治動員のほとんどが宗派や民族に基づいて行われるようになり、国民統合が機能していないので、国家運営においてポストの分配は、実際には制度化されていない宗派や民族を基盤とするようになったのである。同氏は、この状況をレバノンと対比して「制度化されぬ宗派主義」と名付ける。そして、宗派・民族コントロール制度が瓦解し、その結果、宗派・民族意識が先鋭化したこと、政治・社会

的ネットワークがそっくりそのまま宗派・民族化されていること、さらに潜在的な社会亀裂にそって政治的動員がなされていることがその「制度化されぬ宗派主義」の背景にあると指摘した。

混迷の続くイラク政治は、国家運営メカニズムの動態性を研究するための貴重な素材を提供する。山尾氏の報告は、膨大な一次資料の積み重ねと分析に基づいた、極めて実証的なものであった。今後のさらなる理論の精緻化が待たれる。

両報告は、非常に対照的な報告であったといえる。まさに、ディシプリン研究と地域研究の架橋をめざす本研究会の目的に合致したものであった。

報告者：堀抜功二（京都大学）

**KIAS ユニット 1 「国際関係」主催「イエメン宗教学校教師との懇話会」**
**（2007 年 11 月 19 日　於京都大学）**

講師；
Abudulrahman Ali Abobakr Balfaqih ( タリーム研究出版センター センター長 )
Zaid Abdulrahman Hussein Bin Yahya ( ダール・アル＝ムスタファ教師 )
Omar Hussein Omar Al-Khateeb ( ダール・アル＝ムスタファ教師 )
Abdulkarem Sheikh Abbod Ba Sharahil ( ダール・アル＝ムスタファ教師 )
Muhammad Abdullah Ali Al-Aydarous ( ダール・アル＝ムスタファ教師 )

ハドラマウトはアラビア半島における、否、中東におけるひとつの文明の中心地であった。イエメン東岸部に位置する。アラビア半島南部の良港を有するハドラマウトは、古くからインド洋交易の一大拠点となり、西はアフリカ大陸の東海岸、東はインドネシアをはじめとする東南アジアにまで通商のネットワークを拡張し、それらの地域に商人を通じてイスラームを広めた。イスラーム「発祥の地」アラビア半島における、環インド洋世界へのイスラームの「出発の地」である。

それは歴史的な物語であるだけではない。現在もなお、マドラサ（宗教学校）を中心的媒体として、強いネットワークを有している。

本研究会の講師は、ハドラマウトのマドラサ、「ダール・アル = ムスタファ」の教授陣である。若手教師 4 名と、おなじくハドラマウトの文書館（タリーム研究出版センター）の責任者 1 名の計 5 名には、ハドラマウトの歴史、同マドラサの運営方針および方法、東南アジア諸国とのネットワークなどを中心に、詳細に論じていただいた。

以下に報告と質疑にかんして、簡単にまとめておく。

第 1 に、マドラサの歴史的な経緯にかんして。1967 年に南イエメンに成立した共産主義政権時代において、ほぼ全てのマドラサ、宗教施設が閉鎖されたという。その期間には地下活動のような形で宗教教育が継続された。また、その後のマドラサの再編成などが、彼らの実体験を交えて明らかにされた。

第 2 に、インドネシアの事務所を中心として、東南アジアに同マドラサ卒業生とのネットワークを有していること。ハドラーミーのネットワークが存在することはつとに指摘されてきたが、本研究会では、実際にこれらのネットワークをどのように構築し、維持しているかが明らかにされた。これは中東と東南アジアの関係を考えるうえでも、極めて大きな重要性をもつ。

さらに、相互交流として、京都大学および同大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の研究・教育方針なども議論の俎上に上がった。

最後に本研究会の意義をもうひとつ付け加えるとすれば、ほぼ全てアラビア語でディスカッションが行なわれたことであろう（一部通訳あり）。これによって、まさに「直接交流」となった。

報告者：山尾　大（京都大学）

**KIAS ユニット 1「国際関係」・京都大学大学院 人間・環境学研究科共催セミナー**
**（2007 年 11 月 14 日　於京都大学）**

講演題目：「パレスチナ問題における宗教者間対話～その可能性と展望～」
講師：
Shaykh Barakat Fawzi Abdul-Hasan (Lecturer in Islamic Studies, al-Quds University, Jerusalem)
Professor Jamal Khader (Chairman of Department of Religious Studies, Bethlehem University, Palestine)
Rabbi Professor Yehoyada Amir (Director of the Israel Rabbinic Program, Hebrew Union College, Jerusalem)

本セミナーは、現地の宗教者が自身の宗教をふまえてパレスチナ問題の現状と可能性を議論するという趣旨で開催された。パレスチナ問題はユニット 1「国際関係」にとって大きな研究テーマのひとつであり、翌 12 月には国内ワークショップも予定されており、それに向けての準備という側面もこのセミナーにはあった。

講師としてユダヤ教のラビ、イェホヤダ･アミール氏、キリスト教の神父、ジャマール･カーディル氏、イスラームのシャイフ、バラカート・アブドゥルハサン氏の３名が招聘され、宗教者の立場からパレスチナ問題をはじめとする民族 / 宗教紛争に宗教が果たす積極的あるいは消極的な役割をどう捉えるのか、そしてパレスチナ問題の解決に宗教がどのような役割を果たすことができるのかの２点について語っていただいた。

パレスチナ問題の現状については３者ともに、本来、領土問題やナショナリズムに起因する政治的・経済的な問題が、1960 年～ 70 年代に宗教的な言説が席捲し、宗教対立の様相を帯びるようになった点を指摘した。すなわち、一見、宗教紛争と捉えられるパレスチナ問題も、本当は政治・経済的な対立であることを見逃してはならない、ということである。

彼らの議論から明らかになったのは、３つの宗教の対話、交流とその結果としての歩み寄り、言い換えると宗教「間」対話は可能であるという点であった。だがむしろ困難なのは宗教「内」対話である。というのは、現在それぞれの宗教内に穏健派から過激派までさまざまな考えが存在しており、ひとつの宗教の枠組みの中では捉えきれない状況にあるためである。こうした宗教「内」の考えの違いは容易に乗り超えられるものではない。「対話」への参加者は、宗教「横断的」な者たちであって、宗教「内」全てを包摂する勢力ではない。端的に言うと、宗教「間」対話に参加するのは、常に同じメンバーなのである。こうした現状がパレスチナ問題を複雑にしているというのが３者の考えであった。敷衍して言えば、パレスチナ問題にかぎらず、宗教「間」対話を行う際には常にこの問題がつきまとうと考えられる。

報告者：安田　慎（京都大学）

**KIAS 「イスラーム基礎概念研究セミナー」**
**（2007 年 11 月 22 日　於京都大学）**

講演題目：Quranic commentaries in classical Java and Sunda
講師：Ervan Nurtawab (Syarif Hidayatullah State Islamic University of Jakarta, Indonesia)

本研究会は新たに作られた「イスラーム基礎概念研究セミナー」の第一回研究会として企画された。「イスラーム基礎概念研究セミナー」はユニットの活動とは別に、イスラーム理解に不可欠な概念をあつかうセミナーである。今回はインドネシアのシャリフ・ヒダヤトゥッラー・イスラーム大学よりエルファン・ヌルタワブ (Ervan Nurtawab) 氏を招聘し、“Quranic commentaries in classical Java and Sunda” という題目で発表していただいた。具体的には 18 世紀から 20 世紀にかけてのジャワとスンダにおけるジャワ文字、ペゴン文字、アラビア文字のクルアーン翻訳（タフスィール）について、その地域別の使用言語と表記に用いられた文字の特徴が論じられた。

まず「ジャワ語」と「ペゴン」について説明しておく。本研究会で用いられたジャワ語 (Javanese Language) とは古代ジャワ語を指す。古代ジャワ語はサンスクリット語からの多くの借用語を有し、その字形もサンスクリット語に近似しており、主に宮廷内で使用された言語である。他方、ペゴン語 (Pegon Language) とは、アラビア文字表記のジャワ語のことである。なお紛らわしいが、ジャウィー語 (Jawi Language) はアラビア文字表記されたマレー語を指す。この手のものには他地域にもに、中国ムスリムが使用する小児錦（アラビア文字表記の漢語）などがある。

なお我々がタフスィールという語から通常連想するのはクルアーン注釈のことであるが、本発表では翻訳と注釈の両方を含み持つ広義の意味で使用されていた。

本研究会では以下の３点がヌルタワブ氏から指摘された。第１に、当該地域におけるクルアーン翻訳には、アラビア語併記のものと、アラビア語が併記されていないものの２種類があるということ。第２に、ジャワにおけるクルアーン翻訳は大半がジャワ語を使用しており、マレー語やその他の言語が用いられているものは存在するものの、稀だということ。また、その表記は、ジャワ語とペゴンによるものがあるという点。第３に、スンダにおけるクルアーン翻訳は多くはアラビア語が併記されておらず、ジャワ語、スンダ語、マレー語、アラビア語を用いたものが発見されており、表記にはペゴンかアラビア語が用いられているという点である。その他、ジャワ語で書かれたクルアーンなどの貴重な資料、および解釈書のリストが紹介された。インドネシアの多様な言語環境のなかでクルアーンがさまざまな形をとっているわけであるが、どの表記・言語を使うのかに関しては歴史的な変遷が垣間見られることも併せて報告され、その要因はわからないところが多いものの、イスラームの地域化のさまざまなあり方、変遷として捉えることができるのではないか、という提言もなされた。

本研究会は、クルアーン翻訳と使用言語という、東南アジアでのイスラームの受容を考察する上で大変貴重な発表であった。

報告者：木下博子（京都大学）